

ドラえもん～のびたの逆襲のシャア～

Gunninja

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつものごとくスネ夫の旅行自慢で仲間外れにされ、ドラえもんに泣きつくのび太。

そんな彼らが送る日常の傍ら、宇宙から地球の未来がかかった危機が迫りつつあった。

忌まわしい記憶とともに……。

宇宙空間で渦巻く様々な思いが織りなすドラえもんクロスオーバー大長編!!

ここでは初めての投稿になります。

Youtubeでこの動画見たら触発された結果これです。

無断で動画作者さんすみません。

<https://www.youtube.com/watch?v=OkkvjfEWEA&t=4s>

なお、流れはこの動画の通りではなく、わたくし独自の解釈・アレンジがめちやくちや入ってます。

目次

第1話	未来が消えた!?	1
第2話	タイムパラドックスの原因	10
第3話	宇宙へ	18
第4話	邂逅	28
第5話	作戦開始!!	40
第6話	脱出!!	53
第7話	ロンド・ベル隊	69
第8話	ヅガンダムとどこかで見たモビルスーツ	86
第9話	ジオンの第2波	102
第10話	全員集合	120
第11話	ララアが来る	133
第12話	死闘(バーチャル)の果て	154

第1話 未来が消えた!?

緑豊かなコロニー、ロンデニオン!

光あふれるコロニー、ロンデニオン!

観光はもちろんのこと、現地での冠婚葬祭、式典、その他イベント、サイド1内でも環境が整った美しいコロニー、ロンデニオンはそんな催しにまさにもってこいなユートピア!

皆さんも、ぜひロンデニオンにお越しください!!

「……っていうCM、よくやってるでしょ?」

いつもの空き地にスネ夫の興奮気味な声が響く。

「ええ、テレビ見てたらよくそんな旅行のCMやってるわね。」

ええつとと、日頃のことを思い出そうとするしずか。

「でしょでしょ!?!」

「そのロン……なんたらコロニーがどうしたってんだよ?」

相変わらずテンションの昂るスネ夫に対して、ぶっきらぼうに質問するジャイアン。

「ええ、ごほん!失礼。ここで本題に入ります。不肖、この骨川スネ夫……みんなにいろんな場所への旅を提供してきたけど……ついに……ついに……!!」

勿体ぶり、これでもかとセリフためるスネ夫につられて、ジャイアンは思わず固唾をのんだ。

「ジャン!!手に入れました!!ロンデニオンコロニーへの切符を!!」

テンションに合わせて、スネ夫は手を後ろにしていたのを、勢いよく振り上げ、手にしている「3枚」の切符を掲げ、3人に見せつけた。

「ロンデニオン行きのコロニー？つていうことは……宇宙に行けるってこと!？」

しずかは、空を見上げながら聞き返した。

「ズバリ、その通り!! ついに、宇宙旅行にみんなを連れていけるんだ!!」

スネ夫はまさに勝利を宣言するかの如く、自身の人差し指を天に突き付けた。

「素敵!あの満天の星空を、直に眺められるのね!」

「おおく!ほんとかよ!!でかしたスネ夫!!俺は……俺はお前のような友をもって、今猛烈に感動している!!これからも永遠に深い絆でつながっていよう、心の友よ!!」

テンションと勢いのあまりに涙を流すジャイアンのオーバーリアクションに若干スネ夫は引き気味になっていた。

「宇宙に行くの!?!じゃあ、何を準備すればいいんだろう!?!歯ブラシかな?おやつかな?まくらか……」

というのび太の発言で、一瞬で凍り付くかのように、スネ夫は静寂した。そして次の瞬間……

「のび太さ、なんか勘違いしてない?」

「勘違い?」

のび太は今でこそ、鳩が豆鉄砲食らったような顔になった。

「誰も のび太連れて行くなんて言っていないんだけどな。」

「ええ〜!? なんですき!!?」

「なんでってそりゃ根本的な問題さ。だって切符は3枚しかないんだよ。」

スネ夫は自身が手にしている3枚の切符をしつかりとのび太の目の前に見せつけた。どうあがいても、何度のび太が目をこすっても、切符は3枚しかない。

言い出しつぺのスネ夫が行くのはもちろん、しずかとジャイアンを誘えば、ちようど3枚使い切り、残りはゼロとなる。

「ぼくとしずかちゃんどジャイアンとで行けば、もう切符なんてないよ。そういうわけで悪いけど例のごとく、のび太の分は……」

もう、言わずもがなという感じで、スネ夫は最後まで言わずセリフを途中で切った。

「……ま、のび太くん。人生生きてりやいろんなことあるって。」

うんうん、と頷きながらわざとらしく同情する素振りでのび太の肩をポンポンとたたくジャイアン。

そして、数分間の間を置いた後、のび太はゆっくりと飛び立つロケットのごとく、空き地を爆発するかの如く猛ダッシュで走り去っていった。

...

ドラえもんは、のび太の部屋でいつものごとく好物のどら焼きをほ

くつたのび太が突撃してきた。

「ドラえもん!!」

と大声で突撃すると同時に、のび太はドラえもんを抱き着き、その勢いでドラえもんは倒れた。

「……今度はなんだいのび太君？スネ夫に何を自慢された？それで仲間外れにされた？」

「すごい！まだ何にも言っていないのになんでわかるの!? ニュータイプ!?!」

「これだけでニュータイプに……しかもこのび太君のそれでなれるもんなら、ジオン・ダイクンも頭を抱えるよ。」

「ひどい!!」

「こんなやり取りもう何十回……いや、何千回やってると思ってるの。それだけやってりやいやでも覚えるよ。」

やれやれ、とドラえもんは抱き着くのび太を振り払って、起き上がった。

そして泣きじやくりながら言うものでほとんどなに言ってるかわからないのび太の話をドラえもんは解読し、ことのあらましを聞いた。

「今度は宇宙旅行を自慢されたのか。しかもコロニーって……。」

「みんな僕を仲間外れにして!!!」

「……で、僕にまた宇宙へ行く道具を出せとでもいうの？宇宙旅行なんて過去に何回も行ってるのに、なんで今更そこまで泣きつくほど……。」

「だってスネ夫に自慢されて仲間外れにされたんじや、悔しくて悔しくて!!!」

「それもいつものことじゃないか。」

ドラえもんは食べかけだったどら焼きを一気にほおぼり、一つを完食する。

「ま、僕がこのまま出し渋って、そのままギャーギャー喚かれ続けても困るから、なんか宇宙に行ける手ごろなものあったかな……?」
「なにになに!?!何かあるの!?!」

ドラえもんが四次元ポケットに手を突っ込んだ瞬間、泣きわめいていたのから一転して、一気に期待の表情となるのび太。
するとその時、四次元ポケットの中から、けたたましい軽アラームのような音が鳴り響いた。

「な、なに!?!」

あまりの突然の音に、のび太はドラえもんから飛び退いた。

「着信だ。タイム電話。」

ドラえもんは四次元ポケットからタイム電話を取り出した。先ほどのけたたましいアラーム音、もとい着信音が直に響いてくる。

「ドラミからだ……もしもし、ドラえもんです。」

ドラえもんはタイム電話の液晶に移っている通話ボタンを押すと、液晶にはドラミちゃんの顔が映った。

「あ、お兄ちゃん!つながった!!!」

「なんだいドラミ?なんか慌てるみたいだけど。」

「ゆっくり説明してる時間はないの!単刀直入に言うから聞いて。」

液晶に映るドラミの表情は、何やら切羽詰まっている表情だった。

「お兄ちゃんよく聞いて……………未来が……………22世紀が……………!!」

すると、ドラミの音声と画面にノイズが走り、まともな通話ができなくなった。

「あれ?つながりが悪い……………ミノフスキー粒子が濃いのかな?もしもし!?ドラミ!?何があった!?未来がどうしたの!?!」

ドラえもんは必死に電話に問いかけるがノイズは次第に激しくなり、やがては砂嵐がドラミの姿と声をかき消した。

そして、完全にノイズだけになった直後、ぷつりと通信が切れて、液晶画面は真っ暗になった。

「切れちゃった……………ドラミちゃん、なんか必死に言ってたみたいだけど、未来で何があったんだろう?」

先ほどまで感情の起伏が激しかったのび太は、現在の異様な事態に不安な顔つきになった。

「……………だめだ。かけなおしたけどつながらない。」

「圏外かな?」

「……………いや、今、音声ガイダンスを聞いてるけど、その電話自体が存在しない扱いになってる。」

ドラえもんはタイム電話を必死にいじくりまわした。しかし、いじくればいじくるほど、ドラえもんの表情は険しくなっていた。それを見たのび太も、つられてさらに不安さを増す。

「な、何ドラえもん?さつきからなんかだんだん怖い表情(かお)に

なってるけど……どうしたの?」

「……おかしい。」

「おかしいって?」

「このタイム電話は、通話するだけでなく、カメラ機能とかを通して、いろんなデータが入ってるんだ。」

「それがどうしたのさ?」

のび太はドラえもんが手にしているタイム電話の画面を覗いた。

「その中に入ってるデータ……特に未来で撮った写真とかなんだけど……次々と消えて行ってるんだ。」

「それって機械の故障じゃないの?」

「それも考え……いや、その兆しはない。何も操作していないのに、勝手に消えて行ってる。故障だったら一気にデータが消えるはずなんだ。それも一個一個ゆつくりと……不気味だ……あ、また消えた!!」

タイム電話の液晶画面に表示されていたデータフォルダの中身は、先ほどまで画像ファイルで敷き詰められていたのは、のび太も確かに目にしていたのに、次の瞬間一個一個消え始め、フォルダには真っ白の画面が表示されるだけとなった。

「あ、ほんとだ!みんな消えていく!」

「いったい何が起こって……ああっ!」

そしてついには、ドラえもんが手にしていたタイム電話そのものが消えた。フェードアウトするように消えてしまったのだ。

「た、タイム電話が!!」

「……まさか……まさか!!」

すると何かに気が付いたドラえもんは、四次元ポケットを激しく探

り出し、中に入っている秘密道具を追い出すかのようにすべて外に出した。

「……あつた。これだ。」

「その本は何？」

ドラえもんの手には一冊の少し古こけた本があつた。

「22世紀の歴史書だよ。今までこの地球上で起こった出来事が自動で追記されていくんだ。」

ドラえもんは本の説明をしながらパラパラとめくっていく。

「……やはりそうか。」

「どうしたのさドラえもんさつきから！」

「簡単に言うよ、のび太くん……僕のいる22世紀は……未来は……。」

ドラえもんの声は先ほどとはさらに重いものになっていた。そんな険しい空気に固唾をのむのび太。

「未来の世界は……消えてしまった。」

第2話 タイムパラドックスの原因

宇宙行の空港はごった返していた。手続きをする人によってカウンターから長蛇の列ができています。

「……なあ、スネ夫。いつになったら宇宙に行けるんだよ？」

「だ、大丈夫だよジャイアン。もうすぐさ……。」

待ちくたびれて機嫌が若干悪いジャイアン。一触即発の爆弾がそばにあるかのようにスネ夫はびくついていた。

「でも、この分だとまだかかりそうよ？みんな旅行かしら？」

しずかちゃんやさんはカウンターがある方向に向かって背伸びしながら見渡した。

手続きはてきぱきと進んで確実に列は進んでいるのだが、いまだに到達するには時間がかかりそうだ。

そしてようやくスネ夫達3人はカウンターにたどり着き、速やかに手続きを済ませて長蛇の列から脱出した。

「はあ、旅行シーズンでもないのにどうしてこんなに混んでるんだよ。はあ……ジャイアンの癩癩に付き合わされるの僕だつてのに……。」

「ん？なんか言ったかスネ夫？」

「あ、いや別に。」

「ギャー!!」

3人が話をしていると、横から悲鳴が聞こえた。3人は悲鳴が聞こえた方向を振り向くと、そこには、帽子をかぶった壮年の男と、それに付き添うかの成人女性と、若い少女の3人だった。

「あなた、また！またクエスが噛みました!!」

「クエス、こんなところにまで来て、よさないか。」

スネ夫たちには3人がもめているように見えた。

「なんだなんだ？喧嘩か？」

気になったジヤイアンは身を乗り出して喧嘩する3人を傍観した。

「もう嫌です！こんな子と宇宙に行くくらいなら、いつそ地球で凍え死んだほうがましです！」

「そうしなよ、年増ア。」

壮年の男にクエスと呼ばれた緑髪の少女は、成人女性に向かってあっかんべーと舌をした。それが癪に障ったのか成人女性は手を出すも、クエスに避けられこけそうになる。

「……嫌よこんなの!!」

「キャシーー！」

壮年の男は成人女性を呼び止めるも、成人女性は激しく踵を返し、そのまま怒った足取りで空港を後にした。

「……死んじやえばいいのよ。行こう、宇宙へ。」

クエスはふんと鼻息を鳴らし、壮年の男の手を引いて、乗り場に向かおうとした。

すると、

ドンッ

「うわっ!?!」

そのままいきなりずかずかと歩いてきたクエスに、スネ夫が捌ききれずぶつかってしまい、尻もちをつく。

「スネ夫さん!?大丈夫!?!」

「……子供がこんなところでウロチョロしてんじゃないよ!!」

尻もちついたスネ夫に、クエスは怒号を飛ばして、そのまま去っていった。

「……なんだよ自分からぶつかってきといて!!子供って……自分もそう変わんないじゃないか!!!」

スネ夫はクエスに怒鳴りつけるも、クエスは知らんふりして去っていった。

スネ夫たちは10歳。クエスは13歳。確かにそこまで変わらな

い。

「……いけ好かない女もいるもんだな。」

ジャイアンはしずかちゃんとクエスを見比べながら言うが、しずかちゃんは特に気にしていなかった。

「大丈夫かい?君。」

すると、クエスたちが行ったあとから、別の赤い背広の整った少年がスネ夫に手を差し伸べた。

「え?あ、はい、どうも……。」

いきなり見知らぬ少年に手を差し伸べられて少し戸惑うも、そのまま手を引いてスネ夫は立ち上がった。

「空港には、いろんな人たちが集まるし、今日はいつにも増して混んでるみたいだからね。気を付けたほうがいいよ。」

「ハサウエイ、何やってんの!?!」

“それじゃ”と言って、ハサウエイと呼ばれた少年はカウンターに並ぶ行列に戻っていった。

「素敵なお兄さんだったわね!」

「……自分も僕らとそう変わんないのに、あつちは紳士的だったなあ……。」

クエスとは対照的な優しさに、自分もいずれ社長になるならば、あなってみたいと憧れをほんのり抱くスネ夫だった。

……

「……ドラえもん、それどういうこと!?!未来が消えたって!?!」

「……そのままの意味だよ。歴史書には、僕やドラミ、セワシ達が存在する時代までの出来事が書かれていたんだけど、それがそっくりそのまま消えた……なかったことになったんだ。」

ドラえもんが歴史書を開いてのび太に見せると、そこには“NO DATA”と書かれているだけで、未来については何も書かれていなかった。

「未来が消えれば、どうなるのさ? ドラえもんが帰れなくなるわけ?」
「……それならまだマシなほうだ。」

ドラえもんは目をそらしながら言った。

「……そうだ！ドラミちゃん！ドラミちゃんはどうなったの!?セワシは!?あれからみんなどうなったの?」

「未来が消えた……存在しなくなった……全てなかったことになるということは、みんな最初から存在しなかったことになる。」

「つまり……消えた?完全にいなくなったってこと!?!」

のび太の質問にドラえもんは静かに頷いた。

「で、でもドラえもんは!?ドラえもんはどうなるのさ!?ドラえもんだって、未来から来たわけだから……!!」

「のび太君、いつも言ってるだろう?未来は変わることがあるって。だから君はジャイ子と結婚する未来もあれば、しずかちゃんと結婚する未来もある。」

そういつてドラえもんはポケットから何か適当に秘密道具を取り出した。出てきたのはスモールライトだった。

「さっきのタイム電話、見たらろう?……タイムパラドックスが起きたんだ。」

「タイムパラドックス?」

あまり聞きなれない言葉にのび太は首を傾げた。

「未来の世界があるのは過去の世界があつてこそなんだ。その過去の世界で何かが起こると、未来も変わる。それがタイムパラドックスさ。」

「じゃあ、未来が存在しなくなったということは、過去に何かが起きたってこと!?!」

「そう……そしてタイム電話が作られることもなかったことになった。だから消えたんだ。」

「で、でも過去の世界で未来が消滅するような出来事って、いったい何

なんだよ!?!それに、過去って言ってもいつの時代さ!?!江戸時代!?!戦国時代!?!まさか原始時代!?!」

のび太は半ばパニックになる。

「落ち着いてのび太君。まず、今パラドックスが起こっているのは、僕の持つ秘密道具をはじめとして22世紀のものだ。のび太君の時代のものに何の影響もないところを見ると、この時代より前に何かが起こっていることは多分ないだろう。」

そういつてドラえもんは、もう一度歴史書をパラパラと開き始めた。

「何が起こったのか、事件の詳細は分からずとも、いつの時代かぐらいはあてることができる。」

歴史書をパラパラめくっていると、NO DATAの文字が、先ほどより増えているようだった。タイムパラドックスは進んでいることが考えられる。

「2011年……ノビスケ、僕の息子の時代だ……ああ、それもない!!」

そこから少しさかのぼり、のび太としずかちゃんが結婚したという出来事も消えていることが目に入ると、のび太はひどく落胆した。

「どこだ……どこで何が起ころうとしているんだ……!?!」

ドラえもんは歴史書から、歴史が途絶えている地点を見つけ出そうとする。

「……あつた！ここだ！」

「どこ!?どこでなにが……いつ起こるの!？」

「199X年……ここから歴史が途絶えている。」

ドラえもんが歴史書に指さすと、確かに199X年以降の歴史情報
がなかった。

「199X年って……僕らの時代、今じゃないか!!」

自分の住む時代で歴史が消えてなくなるほどの出来事が起こるこ
とにのび太は驚愕した。

「いったい何が、今から何が起ころうとしているの!？」

「何が書かれているんだ……これから何が起ころうと……あつ!!」

ドラえもんが199X年の最後の欄に何が起ころうとしているの
かを見ようとした瞬間、歴史書もタイム電話と同じく、フェードアウ
トして消えてしまった。

「ああ〜っ！これじゃ何が起ころかわからないじゃないか!!!ほかにな
んかないの!？」

「今、宇宙完全大百科端末器を取り出そうとしたけど……だめだ遅
かった。」

ドラえもんがポケットから分厚い百科事典のような宇宙完全大百
科端末器を取り出そうとしたが、直後にこれもまたフェードアウトし
て消えた。

「う〜ん……でも、最後の行にあることが書かれていたのは覚えた。
それを手掛かりにするしかない。」

「手掛かり?何なのそれ?」

第3話 宇宙へ

「とにかくこの時代で、そのアクシズに関係のある事件が、原因かもしれない。それを突き止めなければ……!」

「22世紀が……地球の未来が危ない!!」

のび太とドラえもんは、急いで部屋を後にし、外に出ようと階段を駆け下りた。しかし……

「でも、そのアクシズを手掛かりに、どこで何を調べるのさ!」

「うーんそれなんだけど……どこが手ごろかな……図書館か?」

急ぎ足を止め、考え込むドラえもんだった。その時。

「ここで、臨時ニュースをお伝えします。」

今のテレビの音が、のび太とドラえもんを引き付けた。

「資源採取用小惑星、ファイブス・ルナが地球に向けて進行していることが判明いたしました。地球とファイブス・ルナの距離は刻一刻と近づいており、場合によっては地球への落下・衝突が考えられます。観測班の情報によりますと、落下予測地点はチベットのラサとされていることが分かりました。」

「ドラえもん……小惑星ってなんか、でかい隕石みたいだね。」

のび太はテレビに映ったファイブス・ルナを見て感想を述べた。

「このことから、先日声明の発表があった、ネオ・ジオン総帥“シヤア・アズナブル”の地球連邦政府に対する、コロニー・スウィートウォーターを領土とした、独立宣言との関係性も考えられるという声も上がっております」

次にその総帥とされる、金髪のオールバックで、赤い軍服が特徴のシヤア・アズナブルの姿が映し出された。

「地球連邦政府が、スイートウォーターの主権を認めない場合、我々は地球連邦軍の中心であるラサに対して、直接的な攻撃を行う。」

シヤア・アズナブルの声が野比家の居間に響き渡った。

「この件について政府は、現時点で何もコメントを述べておりません。なお、ファイフス・ルナ落下による日本への被害、津波の心配はございません。」

テレビからは臨時ニュースの乾いた声が聞こえてきた。

「嫌ねえ……小惑星つてあんな大きな石がポンポン地球に落つこちてきたら、たまったもんじゃないわ。まあ、日本に落ちないだけマシかもしれないけど……。」

テレビを見ていたのび太のママが、ニュースを見て少し憂鬱になっていた。

居間の入り口から、小惑星落下のニュースを見ていたのび太とドラえもんは……。

「……ドラえもん、まさか……!!」

「これだ！ひよつとしたら、この小惑星の落下に、何かあるかもしれない！例のアクシズにも！」

「そうと決まれば……!!」

のび太はこぶしを握って気を入れると同時に、ドラえもんとともに家を飛び出した。

「とにかく空き地に向かおう！そこで宇宙へ行く手段を出す!!」

「宇宙救命ボート!?!」

「でも急ぐんだ！タイム電話や歴史書と同じように、秘密道具もタイムパラドックスで次々と消えかかっている!!」

ドラえもんは足を速めた。

「一気に全部消えたりはしないの!?!」

「そういう事例もあったりするけど、今回はどうやら個別にタイムラグがあるみたい。だから幸いにも、みんな一度に消えることはないみたいだ。頼む……まだ消えないでいてくれよ!!」

そういう急ぎの問答をしながら走っていると、ドラえもんのび太は空き地についた。

「ドラえもん！早く宇宙ボートを!!」

のび太は促したが、すでにドラえもんはポケットから宇宙救命ボートを探し出していた。

「……よかった、まだあった!!宇宙救命ボート!!」

宇宙救命ボートを出すや否や即座にハッチを開け、二人は中に駆け込んだ。

「ファイブス・ルナがもうどこにあるかはわかっているんだ。あとはその座標を手動（マニュアル）入力して……」

ドラえもんはボートのコンソールパネルを操作し、急いで座標を入力した。入力が終わると音が鳴り、緑色の進行に影響がない画面が表

示された。

「よし、出発〜！」

ドラえもんの声に応じるかのように、宇宙救命ボートのブースターから火が吹き、地上から宇宙に向かって飛び立っていった。

「ファイフス・ルナに着いたらどうするの？」

のび太は座り込んで、これからどうするかを聞いた。

「まずファイフス・ルナの地球への落下を阻止しよう。となると、ファイフス・ルナの進行方向を変えるか、あるいは完全に破壊するか……それもなるべく早く。もたもたしていると秘密道具が消えてしまって、何もできなくなる。」

のび太は先ほどの消えたタイム電話をもう一度思い出し、悠長にしていられないと思うと内心落ち着いてはいられなかった。

「そうだ、テキオー灯を当てておこう。宇宙に出るから。」

ドラえもんはポケットからテキオー灯を取り出し、のび太に当て、そして自身にも当てる。こうすることで24時間、温度、重力、圧力、光、大気など、環境を形成するすべての要素に適応し、水中や宇宙空間でも、地上と同じように過ごすことができる。

「さあ、そろそろつくよ。」

ドラえもんがコンソールパネルを操作すると、外の様子が画面に表示された。画面には、ファイフス・ルナが映し出された。

「うわ、間近で見るとでかい!!……あれ?でもなんか隕石の周辺が光でチカチカしてない?」

のび太の言うとおり、電球やイルミネーションが点滅するかのよう
にファイブス・ルナの周辺で数々の光が点滅している。

「これは……戦闘が始まっているのか!?ミノフスキー粒子の濃度と流
れが乱雑だ!」

「戦闘って、何と何が戦ってるのさ!」

「さっきニュースに出てた、シヤア・アズナブルが率いるネオ・ジオン
の軍だろう。本当に落下させるのなら、邪魔させないためにも護衛は
つけるだろう。」

「じゃあ、そのシヤアって人、ほんとうにあの小惑星を落として、地球
をつぶすつもりなのかな?」

「それに対抗して、地球連邦軍が戦ってるんだ。こんな小惑星が地球
に接近してるってなれば、地球連邦軍も黙っちゃいけない。」

ドラえもんとのび太を乗せた宇宙救命ボートがファイブス・ルナにさ
らに接近する。すると、宇宙救命ボートのそばを、何かが横切った。

「な、なに!?今なんか通ったよ!」

すると、似たようなものがもう一度横切った。今度はのび太の目に
ドラえもんの目にもしっかりとらえることができた。

「……ロボットだ!!ドラえもん、宇宙空間をロボットが飛んでるよ!!」

「あれはモビルスーツ……地球連邦軍のだ!!」

のび太とドラえもんが通ったモビルスーツの群れは、薄いグリーン
が特徴のジェガンだった。

「あのロボットたちが、隕石を止めに行くのかな？」
「フィフス・ルナの周辺はもうかなり戦場化してるみたいだな。」

のび太は、次々とフィフス・ルナに向かって飛んでいくジエガンを一機一機目で追っていく。が、ジエガンのうち何機かはフィフス・ルナから飛んできたビームに直撃し、到達できず途中で爆発してしまう。

「あゝっ！やられちゃった！」

「ネオ・ジオンの攻撃は想像以上に激しいようだ。小惑星からくる攻撃に気を付けて！」

宇宙救命ボートはフィフス・ルナからくるビームの流れ弾をよけつつ、フィフス・ルナに徐々に接近していった。接近するにつれて、ネオ・ジオン軍のモビルスーツ、“ギラ・ドーガ”や、赤い色が特徴の戦艦“ムサカ級”が見えるようになってくる。

「戦艦まで……ここまでの戦力をそろえていたなんて……見つかって攻撃を受けたらひどいかもしれないな。どちらと鉢合わせするにしろ相手は軍人だ。見つからないようにしよう。」

ドラえもんはなるべくネオ・ジオンの視界に入らないよう、慎重に隠密にボートを進めた。

やがてボートはフィフス・ルナの地表に着陸した。

「……今のところ、だれにも見つかってないね。」

「スモールライトを使って小さくしてみない？そうすれば簡単に……。」

「僕もそれを考えたけど、遅かったよ。」

「まさか、スモールライトも消えたの!?!」

ドラえもんはのび太の問いにお手上げのポーズをし、すでにスマートフォンライトがないことを示した。

「こうなったら、今ある分の道具で何とかするしかない。」

「何があるの？」

「……この高性能爆弾しかないな。」

「ぞ、それって……!!!」

のび太はドラえもんが出した高性能爆弾に見覚えがあつた。ドラえもんがネズミへの恐怖のあまりに取り出した危険アイテム、“地球破壊爆弾”の見た目そのものだったのだ。

「地、地球破壊爆弾じゃないか!!いくら小惑星破壊するって言ってもこれじゃ地球も一緒にふっとんじゃうよ!!」

「うん、見た目はそうだ。でもこれはその地球破壊爆弾じゃない。それよりも出力がうんと下の、小惑星を破碎するための建設用爆薬なんだ。以前僕が出した地球破壊爆弾は、地球クラスの惑星用のものになる。」

ドラえもんはそう言いながら、高性能爆弾が作動するかチェックする。うまいこと点火したが、まだ爆発させるわけにはいかないので、すぐさま消した。

「よし、行こうのび太君!」

ドラえもんは宇宙救命ボートを勢い良く開け、ファイフス・ルナの地表に飛び出した。

その瞬間広がった光景は、ネオ・ジオンのギラ・ドーガと、連邦軍のジエガンが戦っている戦場の凶だった。

「すごい迫力……。」

のび太はうろたえた。

「ひるむなのび太君！時間がない!!」

「うん！……あれ？」

のび太が進もうとすると、彼の視界にあるものが入った。

ジェガンとは違う、角が生えた複眼の緑と紺色のモビルスーツ“リ・ガズイ”と、そこらへんのは明らかに兵装が豪華な赤いモビルスーツ“サザビー”。2機のモビルスーツが対峙している場面だった。

「あれも地球連邦軍のロボットかな？なんか他のやつとちよつと違う。」

「見るからに、並のパイロットじゃなさそうだね……そうだ！」

ドラえもんはポケットから秘密道具を取り出した。

「糸なし糸電話〜！」

糸なし糸電話。名前の通り、糸電話の鳴りをしているが糸がなくても通話ができる。

「糸なし糸電話？誰と電話するのさ。」

「この糸なし電話には、盗聴機能もあるんだ。これをあの赤いのと緑のやつに向けてみて、中の人の声を盗聴できる。さっきからあの対峙しているモビルスーツたちに通信の電波らしきものが飛び交っているんだ。その通信を盗聴できれば、何かわかるかもしれない。」

ドラえもんは二つ出した電話のうち一つをサザビーとり・ガズイに向け、もう一つをのび太に手渡した。

「よし、聞いてみよう！」

ドラえもんとのび太が、それぞれのモバイルスーツに向けて糸なし電話を向け、耳を澄ましてみた。すると、スピーカー越しの若干ノイズの入った声が聞こえてきた。

「なんでこんな物を地球に落とす!?これでは、地球が寒くなつて人が住めなくなる！」

核の冬が来るぞ！」

この声は、リ・ガズイから聞こえてきた。

「地球に住む者は自分達の事しか考えていない。だから抹殺すると宣言した！」

今度は、サザビーから。すると、サザビーは持っていたライフルを撃ち、ビームが放たれた。リ・ガズイは難なくビームを回避する。

そんなリ・ガズイを追撃するかのように、サザビーの背部から赤い筒のような砲塔、“ファンネル”が一機飛び出し、リ・ガズイを追尾し、射撃していく。

「人が人に罰を与えるなどと！」

リ・ガズイも負けじとライフルを発射した。サザビーも難なく回避するが、そのすきをついたのか、リ・ガズイはいつの間にか一気に距離を詰め、接近戦に持ち込み、ビームサーベルを取り出した。

リ・ガズイのビームサーベルはサザビーの装甲をかすめ、サザビーも対抗すべくビームトマホークを取り出した。

リ・ガズイとサザビー、二つのビームサーベルが衝突し、鏖迫り合いつつあった。

「私、シヤア・アズナブルが人類を肅清しようというのだ、アムロ！」
「エゴだよ、それは！」

「地球が持たん時が来ているのだ!!」

シヤアの声とともに、サザビーは鏝迫り合いとなっているリ・ガズィを払いのけた。

「……どうやら、あの赤いモビルスーツに乗ってるのが、シヤアみたいだ。」

ドラえもんは糸電話を外してのび太に解説する。

「本当に、地球をつぶす気だなんて……!」

地球にファイフス・ルナを落とし、破壊しようとする人間が目の前で戦っている。改めて危機に直面し、戦慄するのび太。

「とにかくこのまま放っておけば、地球の未来がなくなる可能性があるのは確かだ!!僕たちもこのファイフス・ルナを止めるんだ!」

「どこに、爆弾を仕掛けよう!」

「ファイフス・ルナは核エンジンで動いているみたいだから、動力部がいかもしれない。」

いざ爆弾を設置しに行動しようとしたその時……

「おい!そこで何をしている!?!」

スピーカー越しの声が響き渡った。

のび太とドラえもんの後ろには、サザビーの兵装を少し控えめにしたようなモビルスーツ、ヤクト・ドーガが立っていた。

第4話 邂逅

「ここは宇宙空間だぞ……なんで人間がノーマルスーツなしに生身で外に出ているんだ!？」

ヤクト・ドーガのパイロット、"ギユネイ・ガス"は、普通なら生身で宇宙空間に生きていられない人間が、目の前に存在している光景に目を疑った。

「……一人はまだガキじゃないか!それにあと……なんだあの"青いタヌキ"は!？」

「僕はタヌキじゃない!!ネコ型ロボット!!」

ギユネイからのタヌキ呼ばわりにドラえもんは腹を立て、むきになった。

「タヌキじゃないのなら、ネコ耳もつけないものかよ!!」

「うっ……痛いところを……!」

「怪しい奴らめ、ファイフス落下の邪魔するってんなら、ここで吹っ飛ばしてやる!!」

そういうと、ギユネイのヤクト・ドーガは容赦なくビームアサルトライフルを構えた。

「まずい!逃げろのび太君!!」

「わーっ!!」

ドラえもんの号令で、のび太とドラえもんは一目散に逃げだした。

「このヤクト・ドーガから逃げられると思うな!!」

ギユネイは容赦なく操縦席の引き金（トリガー）を引くと、ビームアサルトライフルが火を吹いた。

飛来したビームはドラえもんたちのいる地点の近くに着弾したが、ドラえもんたちには直撃せず、少しよろける程度で済んだ。

「チツ、外したか。」

ギユネイはドラえもんたちにもう一度照準を合わせ、狙いを定めた。

そんなヤクト・ドーガに目をくれる暇もなしに、ドラえもんのび太は全力疾走していた。

「ドラえもん！バリアとかなんかないの!？」

「えくつと、バリアバリアバリア……」

ドラえもんは必死にポケットからバリアの類の道具を探し出すが、出てくるのはガラクタばかり。

「あつたー！これならどうだ！」

ドラえもんはポケットからある道具を出すと、すかさず作動させた。いつもなら道具の名前を言って掲げるのだが、今回はそんな暇はない。

「それはなんなの?」

「小型Iフィールド発生器さ。この時代でもIフィールド発生器は存在してるけど、それだとでかいから、未来ではそれが小型化されたものが作られたんだ。」

ドラえもんが説明していると、ヤクト・ドーガのビームが飛来してきた。

ドラえもんたちに直撃しようとするも、Iフィールドのおかげでビームは拡散消滅した。

「ビームをかき消した！」

「馬鹿な！Iフィールドだと!？」

現時点でも普通ならばモビルアーマー級の建造物ぐらいにしか搭載されないIフィールドがなぜこんなところにも？驚きを隠せないギユネイだったが、あきらめずにビームアサルトライフルを撃ち続ける。

「わーこりゃいいや！」

のび太がいい気になっていたのもつかの間、3発目のビームをしのごぎ、4発目を受けた次の瞬間、Iフィールドは一瞬で消し飛んだ。

「あ〜っ！バリアが！」

「だめだ！向こうのビームが強すぎて、バリアでは防ぎきれない!!小型化した分、耐久力も弱まってるんだ！」

「そんな〜！」

「等身大の人間が真っ向からモビルスーツに挑むなんて考えられないから！」

ドラえもんとのび太は息せき切らしながらも一度全力疾走した。すると、配置されている宇宙救命ボートが見えた。元の着陸地点に戻ってきたのだ。

「宇宙救命ボートに乗ろう！一旦退却するんだ!!」

ドラえもんはのび太を引き連れてボートに乗ろうとした。

「あれがやつらの宇宙艇か。させるかよ!!」

するとギユネイはヤクト・ドーガのビームアサルトライフルをドラえもんたちではなく、宇宙救命ボートのほうに向けた。ドラえもんたちはそれに気づいていない。

「落ちろよー!」

ギユネイが容赦なく引き金を引き、ビームが放たれると、宇宙救命ボートに直撃した。

「あーっ!宇宙救命ボートが!」

宇宙救命ボートは一撃で破壊されてしまった。

「ど、どうしよう!?!これじゃあ帰れないよ!!!」

慌てふためくのび太。しかしドラえもんも同じくパニックになっている。

「終わりだな。いくら子供とはいえ、こんなところにノコノコ来るのが悪いんだ。」

ヤクト・ドーガは改めてドラえもんたちに狙いを定めた。

「恨むんなら、自分を恨むんだな。」

ヤクト・ドーガのビームは無慈悲にも放たれ、ビームの直撃で発生した爆炎と粉塵にドラえもんたちの姿はかき消されてしまった。

・・・

ロンデニオン行きのシャトルは大気圏を脱出した。

「わあ、きれい！私たち、星空を間近で見てるのね。」

しずかはシャトル内キャビンの窓から見える成層圏と宇宙空間の境目の光景を見て感動していた。

「へへっ。気に入ったかいしずかちゃん。」

誘ったのは自分という事実を武器に自慢げになるスネ夫。

「なあ、機内食とかまだ？俺、腹減ったんだけど。」

ジャイアンのデリカシーのない横やりがちよつとイラつときたスネ夫だった。

「……あれ？君たちもこのシャトルだったのかい？」

突如声をかけられたスネ夫たちは、声が出た方向を向く。

そこには、スネ夫を助けたハサウエイがいた。

「あ、あなたはさつきさんの紳士のお兄さん!!」

「いやあ、そんな紳士ってほどもないけどなあ……。」

スネ夫の急な尊敬の声に、ハサウエイは照れて頬を赤らめた。

「私たちと同じシャトルだったんですね。」

「うん。あまりに混雑してて、乗れるか乗れないかの瀬戸際だったんだけど、親切なおじさん、アデナウアーさんに席を一つ譲ってもらえたんだ。で、それで僕だけ一足先に。」

ハサウエイが親指で刺すと、親切なおじさんが彼の隣に座っていた。

「私が政治特権で割り込んでしまつてな。その詫びのようなものだ。」

「せーじとっけんつてなんだスネ夫？」

「VIPつてことじゃない？」

ジャイアンたちのやり取りを見たアデナウアーは子供の言うことと思つたからか、軽くせせら笑つた。

そんなやり取りをしていると、スネ夫の視線はアデナウアーのさらに奥のほうの席にやると、そこにはクエスの姿があつた。

「あーよく見ればあの時のいやな女!!」

スネ夫のストレートな呼び方に、クエスはうつとおしそうに鼻を鳴らした。

「私の娘だ。」

アデナウアーはクエスが自分の娘であることを宣言すると、いきり立つて居たスネ夫が引き下がった。

「む、娘さんでしたか……すみません。失礼……」

「今更しおらしくなつたつて。」

クエスは厭味つたらしい顔をスネ夫に見せた。

キャビンのスネ夫たちの席付近は、通路越しに談笑で盛り上がる。

「ハサウエイさんはどうしてロンデニオンに？旅行？」

「旅行つてあんた、気楽なもんね。空から隕石来てるつていうのに。」

ハサウエイとスネ夫の会話に口をはさむクエス。

「あの……僕、今ハサウエイさんと話してるんだけど。っていうか隕石って?」

「知らないのかい君たち? まあさつき速報で流れたばかりのニュースだけど……」

ハサウエイは小惑星フィフス・ルナが地球に向かって進行をはじめ、下手をすれば落下する警報のニュースが流れていたことを話した。

「……それ、本当なんですか?」

しずかは旅行ムードでウキウキだった気分が一転して不安に包まれた。

「僕たちは、その避難で、ロンデニオンに行くんだけど。」

「おい、スネ夫。大丈夫なんだろうな? これから楽しい旅行なのに隕石で事故らないだろうな!」

「ぼ、僕に言われても……。」

ジャイアンの威圧に近い安全確認にスネ夫はたじろいだ。

「……火の玉が。」

「……どうしたクエス?」

ゴタゴタの最中だったスネ夫たち3人も、クエスの突如のささやきに目を向けた。

「火の玉?」

「火の玉なんてどこに？幽霊でもいいんのか？」

ジャイアンの中では火の玉⇨幽霊か何かの人魂という解釈があるのか、あたりに人魂がないかを探した。

「わからないの!?!火の玉!!シャトルの中にあるわけないでしょ!!シャトルの前のほうよ!!」

クエスはキャビンの前方のほうに力強く指さした。

「クエスさん、火の玉ってまさか……その例の隕石のこと!?!」

「キャプテンー!もつと右、右に寄せてよ!!」

いち早くクエスの火の玉の意味に気が付いて問いただすしずかを押しつけ、クエスはキャビン前方の操縦室に向かって、身を乗り出し叫んだ。

ほかの乗客からは、騒がしい連中にしか見えないため、酔っ払いか何かを相手にするかのようにつつとおしがる客もいた。

そんなクエスの叫びが後ろから響く操縦席では、前方からフィフス・ルナとそれに追従する隕石の破片が飛来してくるのが見えていた。

「来たか!!」

「意外と北寄りだったのか。」

機長はシャトル左舷のアポジモーターを吹かして、右への回避運動を行った。

「もつと右よ!右なのよ!」

「クエス、落ち着きなさい。」

アデナウアーは冷静にクエスをなだめる。すると、それを遮るかの

ようにシャトルが振動した。

「ああつ、隕石よ!!」

しずかがキャビンの窓を見ると、ファイフス・ルナの破片の隕石が、掠めるギリギリのところを通過していくのが見えた。

「ほ、ほんとに隕石だーっ!!」

スネ夫も隕石が飛来している光景を窓から見ると、先ほどまでしずかの前でかつこつけていたのとは逆転して、パニックになった。そんなスネ夫の悲鳴に反応してほかの乗客たちも窓の外の隕石を見て次々とパニックを起こし始めた。

「クエス、みんな、落ち着いて!!!」

ハサウエイは身を乗り出すクエスをはじめ、パニックを起こすスネ夫たちもまとめてなだめようとした。

「きやあつ!?!」

「うわっ!」

すると、突如強めの揺れがシャトルを襲い、そのショックでしずかとクエスの体が宙に浮いた。

「ああつ、しっかり!」

ハサウエイはクエスを手を掴んで引き寄せたことで、クエスはハサウエイの上にゆっくりと落ちた。

「大丈夫かしずかちゃん!?!」

しずかのほうはジャイアンが捕まえ、席に戻した。

「ありがとう剛さん！」

シャトルへの隕石襲来のショックは徐々に激しくなり、ファイフス・ルナの本体がシャトルに最接近しようとしていることが乗客全員にもわかっていった。

「うわーん！ママーッ!!!」

「か、神様……!!」

あまりのパニックに、スネ夫は完全に情けないことになっていた。スネ夫がパニックになるとこうなるのはいつものことである。

一方ハサウエイ・クエス側の席では、アデナウアーがうずくまって両手を頭に神に祈る形で、命乞いをしていた。

先ほどの紳士的かつ気丈なアデナウアーを思うと、こちらもかなり情けない。

「こいつら……!!!」

そんなスネ夫と父アデナウアーの情けない姿がクエスの目にしつかり焼き付き、嫌気がさしていた。

・・・

ファイフス・ルナは大気圏突入間近となり、摩擦熱で全体が赤く燃えていた。ファイフス・ルナを確実に目標に向けて落下させるために護衛していたネオ・ジオンのギラ・ドーガや戦艦ムサカも、自分たちが巻き込まれないように次々と引き上げ行き、ファイフスの周辺にはほとんどだれもいない状態となっていた。

現時点で存在するのは、ギユネイ・ガスが登場する専用のヤクト・ドーガと……

「……どうしたギユネイ。帰還するぞ。」

シヤアが乗るサザビーが彼を迎えに来た。

「ヤクト・ドーガがイカれたか？」

「いえ、大佐。自分だけでも帰れます。」

「ならば行くぞ。ファイフスも落下コースに入って、大気圏間近だ。もうだれにも止められんよ。」

「すみません大佐。ですが、ちよつとやり残したことがあります。」

「このタイミングでか？なんだ、言ってみろ？」

ギユネイは先ほど起こったことを簡潔に話した。

ノーマルスーツも来ていない生身の人間、それも少年と、青いタヌキのようなロボットがファイフスの地表で存在していたことを。

シヤアらが知る常識で考えればまずありえないことで、信じるに値しないことだが、シヤアはサザビーの通信機能を通して、ヤクト・ドーガのガンカメラを確認してみた。そこにははっきりのび太達の姿が映っていた。

「……まあ、合成写真なんかじゃないな。ほんとにこんなことが……だとしたらこいつらは一体……？」

「はい。状況が状況でしたから、容赦なく発砲し吹き飛ばしたんです。しかし……なんかまだどこかにいるような、そんな予感がして……それで少し警戒していたんです。」

(強化人間とはいえ、ギユネイのニュータイプの勘か。)

シヤアはもう一度、のび太達が映ったガンカメラの映像を確認した。

「……ギユネイの予感も、ある意味間違いではないかもしれないな。」

シヤアは映像に映っているのび太たちから、胸騒ぎに似た妙な感覚を覚えていた。

第5話 作戦開始!!

ファイフス・ルナのシャアとギユネイがいる地点からかなり離れたところに、人影があった。のび太とドラえもんである。彼らはビームライフルを受けたにもかかわらず生きていた。

「……間一髪だったね、ドラえもん。」

「どこでもドア……こういう使い方をするとは……。」

彼らのそばには、半壊したどこでもドアがあった。黒焦げになって周りに破片が飛び散り、上の半分がなくなってスパークしており、とても正常に使えるような姿ではなかった。

そう、ドラえもんたちはヤクト・ドーガのビームを受ける寸前に、どこでもドアを出して別の場所に移動することで回避していたのだ。のび太とドラえもんは無事だったものの、ポケットにしまう前にどこでもドアがビームの爆風をもろに受けてしまい、大破してしまったのだ。

それが上記の状態である。

「もうこれで、どこでもドアも使えない……。」

息が上がりながらも、また一つ道具がなくなってしまったことのにび太は少しさびしさを感じた。

「感傷に浸ってる場合じゃないぞのび太君。どこか適当にあいつらから離れた場所をセットしてここに来ただけ、運がいいことに機動部の近くに来たみたいだ。」

ドラえもんが指さすと、ファイフス・ルナの地表からエンジンのノズル等の機器がむき出しになっているのが見えた。

「あのロケットブースターみたいなもので、小惑星を動かしていたん

だ。そこに爆弾を仕掛ければ……。」

「隕石を壊せるの!？」

「それしかない!」

ドラえもんとのび太は視認できているエンジンブロックに急いで向かった。

・・・

「ギユネイ。ここももう危険だ。探すのもたいがいにして、引き上げるんだ。お前にはまだ手伝ってもらおう仕事があるからな。」

「はい。ですが、ギリギリまで粘って、だめだったら戻ります。」

シャアの乗るサザビーは速やかにファイフスを後にし、残ったヤクト・ドーガは引き続き捜索に出た。

「どうも……まだどこかにやつらがいるような、そんな気がするんだよな……。」

・・・

「着いた!! 動力部だ!」

「でつかい……!」

のび太の視界には、半径でも数kmある核エンジンのノズルが目に入った。

「こんなでかいの壊すのに、その爆弾で大丈夫なの?……見てくれは例の地球破壊爆弾だけど。」

過去のネズミと爆弾の思い出があるからか、のび太は少し言葉を濁

した。

「大丈夫。威力はしっかりしてるし、地球の破壊にまでは至らない。」

ドラえもんは改めて小惑星破壊用の爆弾を取り出し、起爆装置を操作した。がしかしまだ点火までには至っていない。

「この辺なら、うまく爆破できるはずだ。」

ドラえもんが爆弾を設置しようとしたその時……

「やはり生きていたか!!」

聞き覚えのあるスピーカー越しの声ドラえもんたちの後ろから響いた。ギユネイのヤクト・ドーガだった。

「あーっ!!さっきのロボット!!」

「念のために動力部のほうを確認しておいてよかったぜ。ここをやられちゃたまったもんじゃない。」

ヤクト・ドーガは臨戦態勢に入った。

「お前たち、ここがどういう場所かわかっているのか?ファイフス・ルナの動力部だ。ここをやられてしまつて、ファイフスが落ちなかつたりしたらたまったもんじゃないんだよ。」

「いくらネオ・ジオンでも、民間人を撃つてもいいのか!?!」

ドラえもんはギユネイに負けじと訴えた。

「大気圏突入直前でこんなところに、しかも生身でいる民間人のほうがありえないだろ。」

「た、確かに……。」

「ドラえもん！敵に言われてどうするの!!」

いろいろと殺伐としている状況ではあるのに、思わずいつもの日常でも出そうなツツコミを入れるのび太。

「さつきは何の手品を使ったか知らんが、今度こそ仕留めてやる。」

ヤクト・ドーガは改めてビームライフルを構え、のび太たちに銃口を向けた。

「まずい！逃げろのび太君!!」

ドラえもんの号令で二人は即座に逃げ出した。

「こんな狭い場所で逃げ道なんてあるのかよ。」

挑発するかのようにギユネイは吐き捨てた。

「どこに逃げるのさドラえもん!!」

「通り抜けフープ!!」

ドラえもんは走りながら通り抜けフープを出した。

「何をするつもりか知らんが逃がすかよ!!」

ギユネイはすかさずヤクト・ドーガのビームを撃った。放たれたビームはのび太たちに向かって一直線に飛ぶ。そしてビームは向かいの壁に着弾した。ファイブ・ルナ動力部の壁は戦闘も想定して作られているため、ちよつとやそつとのビームでは崩れず、黒い焦げだけできた。

その焦げの下に通り返けフープでできた黒い穴があった。

「……なんとなくわかるぞ。あの下の穴ににげたな？」

ギユネイの考察通り、ドラえもんたちは通り抜けフープを使った回避に成功し、壁の向こうに逃げていた。

「やーいやーい！そんなでかい凶体だったら、ここまで来れないだろー!!」

「のび太君、あんまり煽るなよ。」

ヤクト・ドーガの攻撃が届かないと確信して大人げなく挑発するのび太を、ドラえもんは注意した。

「……それで逃げたつもりかよ。ファンネル!!!」

ヤクト・ドーガの肩部にある6基のファンネルのうち2基が装甲から離れ射出された。

ファンネルはうまいこと1基ずつ通り抜けフープを潜り抜けた。侵入したファンネルはのび太たちの視界に入った。

「何このドラム缶みたいなのやっ？」

ファンネルが何なのか把握できていないのび太は不用意に近づいた。

「危ない、のび太君!!」

ドラえもんが叫ぶのとファンネルからビームが出るのと同じ瞬間だった。

ビームは放たれたものの、のび太は間一髪回避した。

「そんな武器あり!？」

「逃げろーっ!!」

ドラえもんたちは再び逃げ出した。なるべく狭い廊下を選んで進んでいるが、ファンネルがどこまでも追ってくる。

「表に出ればモバイルスーツが……かといって狭いところに入れば、あの小型遠隔兵器が……。」

「どうするのさドラえもん!？」

「今考え中!!」

正直なところ、全速力で走っているので、考えている余裕がないのがドラえもんの本音だった。

そんな時、通路の分かれ道でのび太にはあるものが目に入り、分かれ道を一瞬通り過ぎたところを後戻りした。

「のび太君なにやってんの!早く!」

「ドラえもん!これどうだろう!？」

のび太は分かれ道の前に立ち、その先にあるものを指さした。彼の指さす方向を見るべく、ドラえもんも分かれ道のところまで戻った。

ドラえもんはのび太の指さす方向を見ると、そこには開けた場所に連邦軍の主力モバイルスーツ、ジェガンが横たわっていた。

「モバイルスーツ……やられた奴が残っていたのか。」

「これを何とか動かせるようにしたら、あいつに対抗できるじゃないかって……。」

ドラえもんはジェガンに接近し、破損個所を確認した。今あるジェガン手足どこも欠損しておらず五体満足で、ところどころに装甲が破

壊され、中の部品が露出しているところがあちこちある状態だった。

「これを直して使うつもりかい？だとしてもどうやって？」

「……タイムふろしきで何とかならない!?大きいからそれをビッグライトを使って……。」

「そうか……でも、まだあるかな……!？」

タイム電話やスモールライトのように、タイムパラドックスでなくなっていることも考えていたため、ドラえもんは恐る恐る四次元ポケットを探った。

「……よかった、まだあった！タイムふろしきとビッグライト!!」

「やった！これで早くこのロボットを直そうよ！」

道具が消えてしまう前にすぐさまドラえもんはタイムふろしきをビッグライトで、ジエガンを覆いかぶせるぐらいの大きさに拡大した。

「のび太君、反対側持って！」

「OK！」

二人掛かりで巨大なタイムふろしきをジエガンにかぶせた。

「これでいい感じに治ってくれるといいけど……。」

数秒後にタイムふろしきをジエガンから剥がした。すると、先ほどとは打って変わって、傷一つないジエガンが姿を見せた。

「やったー！なおった！」

「あとはちゃんと起動できるかどうかを……。」

ドラえもんとのび太はジェガンのコクピットに入った。そしてドラえもんが席についてコンソールパネルをいじくろうとするが、そこで手が止まってしまった。

「どうしたのドラえもん!?早く動かそうよ!!」

「……のび太君。僕は確かに未来から来たネコ型ロボットだけど……。」

「??」

「モビルスーツの動かし方……知らない。」

「ええええええええええええええええええっ!!」

“まだチャンスがあると思った矢先にここまで来て!!”と激しくそう思ったのび太は直後ひどく落胆した。

そして今ののび太の叫び声が聞こえたのか、ヤクト・ドーガが近くまでやってくるのが分かった。ジェガンの中にいるドラえもんとのび太は一瞬凍り付いた。

「鬼ごっこは終わりかと思ったら、モビルスーツ（しかも連邦の）を見つけたのか。」

ギユネイの言葉からして、どうやらドラえもんたちは彼の視界に入っているようだ。

「まあ乗っついていようが関係ない。ここで一気に落としてやる。」

「わああどどどドラえもんくん!!」

敵が目の前まで来ているのに何もできない。なすすべがない。完全にパニックを起こしたのび太。

「今度こそ落ちろ!!」

ヤクト・ドーガはファンネルをジェガンまで飛ばして、とどめを刺そうとした。

空間には、ビームの発砲音が鳴り響く。

しかし、やられていたのはジェガンではなく、ファンネルのほうが破壊されていた。

「な、なにっ!?!」

予想外の出来事に驚くギユネイ。彼の視界には、横たわりながらも腕を上げてビームライフルを構えたジェガンの姿だった。そんなビームライフルの銃口（マズル）からは、煙が立ち上っていた。

「や、やった……動いた!!」

のび太は感嘆の声を漏らした。

「鉄人兵団と戦った時の“サイコントローラー”が、まだ残ってた。」

ドラえもんの言うとおり、のび太の手にはサイコントローラーが握られていた。

サイコントローラー。手の平に収まる大きさの道具で、手に握って動作を頭に思い浮かべ、イメージするだけで意のままにロボットを操ることができる。そんな道具がまだ残っていたのだ。

ファンネルで撃たれる直前にドラえもんはサイコントローラーを思い出し、とっさに出してのび太に渡したのだ。そしてのび太はサイコントローラーを使って、持ち前の射撃技術でファンネルを撃ち落とすのだ。

「ファンネルを撃ち落とすというのか!?!あの一瞬で!!」

ひるむようにヤクト・ドーガが少し後ずさった。

「よくもやってくれたなー！今度はこっちの番だ!!」

のび太はすかさず容赦なくジエガンを立ち上がらせ、ビームライフルで射撃する。

放たれたビームはヤクト・ドーガにあたったが、シールドで防がれた。

「ええい！このギユネイ・ガスに抵抗したな!?民間人とはいえ、もう容赦はしない!!」

ヤクト・ドーガは飛び上がって、上から空襲を仕掛けようとした。それに対抗すべく、のび太たちの乗るジエガンも負けじとビームライフルを連射した。

普段なら、この程度の攻撃ぐらい難なく避けられるはずだと思っていたギユネイだが、ジエガンのビームを直撃はしなかったものの、何発もかすってしまう。

「バカな……俺に当ててきているだど!?!」

ギユネイは焦ったのか即座にビームアサルトライフルを発射した。

「うわーっ!!」

そのビームがジエガンにあたってしまふ。ビームの衝撃でジエガンのコクピット内は激震した。

「射撃はいいようだが、そのほかは言うほどでもないようだな……ならば、ファンネル!!」

ヤクト・ドーガはライフルをしまい、ファンネル残り4基を展開し

た。

「なんのー！これならー！」

のび太は飛んできたファンネルに集中し、すべてのファンネルに向けてビームを撃った。のび太の狙い通り、ファンネルはすべて撃ち落とされた。

「どうだ!!」

決まった！と言わんばかりに傲慢気な顔になるのび太。

しかし……。

「甘いんだよー！」

のび太は気が付くと、目の前に最接近し、ビームサーベルを持ったヤクト・ドーガの姿があった。

「しまったー！懐に飛び込まれた!!」

むなしくもドラえもんがセリフを言い切る前に、ヤクト・ドーガはビームサーベルを上を斬りあげた。ビームサーベルの斬撃により、ライフルを持ったジェガンの腕が切断され、宙に舞った。直後、ヤクト・ドーガはジェガンにけりを入れてしりもちをつかせた。

「ああつ、せつかく直したのに!!」

のび太は吹っ飛んだ腕とライフルに目をやったが次に前を向くと、ジェガンのコクピット前にはヤクト・ドーガが持つビームサーベルの切っ先が向けられていた。

「いいのは射撃だけみたいだな。」

このままビームサーベルが前に押し出されればジェガンのコクピットを貫き、中にいる人間は一瞬で蒸発するだろう。人間でいうと、のど元にナイフを突きつけられているような状態なのだ。

のび太たちは滝のように汗をかいていた。ビームサーベルがコクピットのハッチすれすれまで近づけられているので、コクピット内は蒸し焼きのような状態になっており、温度が高くなっているのだ。そして、やられる寸前ということもあり緊張と恐怖も相まって汗が止まらないのだ。

「命を無駄にしたな。俺に歯向かわなければこんなことにはならなかったんだ。」

そういうと、ヤクト・ドーガはとどめを刺さんとばかりにビームサーベルを振り上げた。

「今度こそ死ねえっ!!」

振り上げたビームサーベルを一気に振り下ろそうとした。その時だった。

別の方向からビームが飛来し、ヤクト・ドーガのビームサーベルを撃ち落とした。

「今度は誰だ!？」

ギユネイは邪魔をされ苛立ちながらビームが飛んできた方向を向く。それにつられるようにのび太とドラえもんも同じくその方向を向く。

そこには、ライフルを構えたり・ガズイがいた。

「ロンド・ベルか!!」

第6話 脱出!!

「ここも、もうだめか……。」

リ・ガズイを駆るアムロ・レイ。ロンド・ベルに所属する階級は大尉のモビルスーツパイロットである。

全方位モニターに映る景色は、ファイブ・ルナが真っ赤に燃え盛る光景だった。もはや限界といったところだった。

「くそっ……シャアを阻止できず、ただこいつが落ちていくのを黙ってみてるしかないなんて……!」

ファイブ・ルナが限界阻止地点を突破してしまえば、もうどうすることもできない。ファイブ・ルナは連邦政府の中心であるチベットのラサに落ち、その周辺は甚大な被害に見舞われるだろう。

事前のブリーフィングで近隣の退避状況は聞いたものの、退避したのは連邦軍の上層だけだ。逃げ遅れている人間は何人もいる。自分はそのような人たちをただただ見殺しにすることになるだろう。

無念極まりなく、悔しいという感情で片付けられるような感覚ではなかった。

その時、リ・ガズイのレーダーに反応があったのをアムロは気づいた。

「これは……ジエガン? 連邦のジエガン隊は引き上げたはずだ。まだ1機残っているとは……。」

レーダーにポツンと1機映る反応を目にした、その直後だった。

(わーっ、やられる!!)

(たすけてっ!!)

「アムロの脳内に直接そんな声が響いた。」

「なんだ!?!子供の声!?!」

声のもとを探ろうとアムロはあたりを見回した。

(今度こそ死ねえっ!!)

「今度は……ネオ・ジオンのシャアの近くにいたやつか。」

もう一度、ジェガンの反応が映ったレーダーがアムロの目に入った。すると、もう一度、助けを求める声が聞こえた気がした。

「しかし、こんなところに子供なんているはずなのにどうして……?」

レーダーに映るジェガンの反応が目に入るたびに、助けを求める子供の声がアムロの脳内に響き渡る。

まさか、そのジェガンの中にその子供が乗っているんじゃないだろうな?ふとアムロはそう思った。

「そこにいるのか……?ならば待ってる!」

アムロはリ・ガズイを加速させ、反応のあるエリアに向かった。そこに着くまではそう時間がかからなかった。

リ・ガズイが到着すると、そこにはジェガンにビームサーベルを突きつけているヤクト・ドーガの姿があった。

「ジェガンの生き残りか!?!」

アムロはヤクト・ドーガに気づかれないように静かにリ・ガズイのライフルを構え、狙撃した。

ビームはヤクト・ドーガのビームサーベルを撃ち落とすとした。

「ロンド・ベルか!!」

そして今に至る。

「もうファイフスは阻止地点突破してんだぞ！なんでまだいるんだよ!!」

ヤクト・ドーガはライフルを構えてリ・ガズイのほうに向いた。ヤクト・ドーガが発射する前にリ・ガズイはビームライフルを連射してけん制する。撃とうとしたものの、一旦ギユネイは回避した。

そして再度ギユネイはライフルを撃とうとするが、ビームが出なかった。引き金を引く音だけがこだまするだけだった。

「弾切れか!!」

ビームアサルトライフルは残弾数ゼロ。ビームサーベルも紛失。ファンネルもすべて撃墜され、ヤクト・ドーガには武装がもうない状態だった。

「……俺が逃げるしかないなんて!!」

ファイフス・ルナもかなりギリギリのところまで来ていることもあり、ギユネイの乗るヤクト・ドーガは退却した。

ヤクト・ドーガが引き下がったのを確認すると、リ・ガズイはライフルを下ろした。

「あのモバイルスーツは……味方かな？見た感じさつきジエガンと一緒にいたから……。」

ドラえもんはリ・ガズイのほうを見て警戒する。すると、ジエガンに通信が入ってきた。

「どうやらリ・ガズイからのようだ」と判断すると、ドラえもんは通信を開いた。

「君たち、大丈夫か？」

ジエガン内に響いたアムロの声が、先ほどシヤアと対峙していたリ・ガズイの声と間違はなく一緒だと、ドラえもんは判断した。

「は、はい、なんとか……。」

すると、周りが先ほどよりさらに揺れだした。

「ここはもうだめだ。早く脱出するぞ。ファイフスが地上に落下する。」

リ・ガズイが先導し、それにのび太たちの乗るジエガンが追従してファイフス・ルナからの脱出を図った。

「あの……よく僕たちがここにいたことわかりましたね？」

通信回線開きっぱなしの状態であることが分かったのか、のび太はジエガンを進めながらリ・ガズイのアムロに対して質問する。

「そりゃあ、レーダーを見ればわかるさ。連邦のジエガン隊はすでに引き上げた状態なのに、一機残っていれば何かと思うさ。」

「もう小惑星が間もなく大気圏に突入するっていうのに……なんかすみません。」

見知らぬリ・ガズイパイロットの善意に申し訳なく思うドラえもんだった。

「それになんとか、君たちの声が聞こえた気がしたんだ。」
「声？」

リ・ガズイのパイロットの突然の話にのび太たちは首を傾げた。

「助けを求める君たちの声さ。レーダーでジエガンの反応をキャッチした時に、君たちの声が聞こえた気がしたんだ。」

そんなはつきり聞こえるぐらい助けを求めたっけ？と疑問に思うのび太。

「はつきりとは聞こえないさ。ただ、なんとなくそう思った……いわゆる勘ってやつかな？それに声を聞くからに、子供の声だった。連邦軍にも若いパイロットはいるけど、いくらなんでも君たちのような子はいないさ。そんなのがジエガンに乗っていること自体も異常に思えてね。」

「すごい……まだ会ってすらもないのに!!」
「ほとんど当たってる……!」

リ・ガズイのパイロットとは顔も合したこともないのに、自分たちのことと状況をあたかもお見通しかのようにズバズバあてられ、のび太とドラえもんは驚いた。

「それで勘に従っていつてみると、ヤクト・ドーガに襲われてる君たちがいたんだ。」

「あの……超能力者（エスパー）か何かですか？」
「よく言われるけど、そんな便利なもんじゃないよ。ただちよつとだけ……ほんの少しだけ勘がいいってぐらいさ。」

のび太の質問にアムロは淡々と返答した。

「そんな便利な力があれば、もはや止められないこのファイフス・ルナの落下を阻止できればどれだけいいものか……。」

アムロはリ・ガズィを加速させるなか、つい愚痴をこぼしてしまふ。

「……そうだー爆弾!!ドラえもん、爆弾どうしたの!？」

のび太は高性能爆弾を動力部に仕掛けてファイフス・ルナを爆破させることを思い出したが、先ほどのヤクト・ドーガに邪魔されたことで、最後までしつかり設置できたのかどうかうやむやだった。

「うん、設置はできてる。あとは起爆装置を押すだけだけど、威力が威力だからこのファイフス・ルナを完全に脱出してからじゃないと、僕たちも危ない。」

このドラえもんの話は、リ・ガズィの中のアムロにも聞こえていた。

「爆弾?君たち、これを爆破させにここにきたのかい!？」

アムロの中では、テロを想定して年端も行かない子が銃や爆弾を持つことがあったとしても、小惑星を破壊するほどの爆弾を持つことはあまり考えられなかった。そのためかのび太やドラえもんがファイフス・ルナを破壊しようとしていることを信じられず、驚きを隠せなかった。

子供ならではの質の悪い冗談にも一瞬間こえたが、直後に持ち前の勘からかなんともなくうそを言ってるようにも思えなかったのだ。

「……」ここで今更な文句を言うようでなんだが、ファイフス・ルナはすでに大気圏間近だ。仮にこんなところで爆破させ、落下を阻止して地表に被害がなかったとしても、ファイフスの粉塵がオゾン層を覆いつくし

てしまう。」

「……そうになると、どうなるのドラえもん？」

アムロの解説をさっぱり理解できなかったのび太はドラえもんに聞いた。

「うーん。大量の砂ぼこりで空がすっぽり覆われるんだ。そうすれば太陽の光が地球に行き届かなくなって、ずっと夜の日が続くようになる。そうすると、気温もだんだん下がって行って、作物も育たなくなって、人が住んでいられないような環境になる。春夏が来ることもないから、永遠に寒いまま。」

「え!? それじゃあ、ずっと冬になるってことなの!？」

「それが、核の冬だ。」

アムロはとどめを刺すかのように締めくくった。

「そうなるのに、爆発させて大丈夫なの!？」

「ふふふ。その点に関してもちゃんと知っててあの道具を出したさ。」

意外とちよつとの判断ミスで大変なことになる瀬戸際なのに、余裕の表れなのか不敵に笑うドラえもん。

「まあ、ほんとだったら進行方向変えて、地球から離すのが理想だったけど、状況が状況だったからこんな荒っぽいことになっちゃったけど。まあ、とにかく急いでここをはなれよう。」

ドラえもんがそう言った直後、後方から誘爆が起こり始めていた。ファイブス・ルナの中に残されている易燃性物質などが摩擦熱で引火し、ところどころで爆発が起こっているのだ。まさにファイブス・ルナの終わりを告げるかのような光景が広がっていた。

「あわわ……ど、ドラえもん！」

のび太はそれを目撃すると、焦り始めた。それが聞こえたのかアムロも急ごうと加速することに意識する。

しかし、リ・ガズイの速度はすでに限界に達していた。これ以上スピードは上がらないし、無理に上げようとすればオーバーロードを起こして機体が爆発することもある。

「……あれは？」

どうにかならないかと模索していると、アムロの目にはとある飛行機のようなものが映った。

「……リ・ガズイのBWS!!」

逃げ道の先にはリ・ガズイ専用のオプションパーツ、BWS（バツクウエポンスステム）が宙に浮いているのが見えた。

このBWSとリ・ガズイが合体することで、戦闘機のような高機動形態となる。ちなみに、ビームキャノンなどの火力系も追加搭載されているため、機動力を生かした一撃離脱の戦法を利用して、対艦戦を行うこともできる、まさにリ・ガズイの増強パーツである。

「そうか……俺が最初につけてきて、途中で分離したものがここに流れ着いたのか。」

リ・ガズイのBWSは主にあらかじめ出撃前に装着され、途中で弾薬がなくなったり、機動系統の破損などで、分離して使い捨てにされるのが大半であり、戦闘中の装着・再装着事例はほとんどないといわれていた。

しかしアムロはある程度の遠隔誘導や、最低限のドッキング・コン

トロールが可能な相互通信システムが搭載されているという仕様がリ・ガズイにあることを聞いていたので、アムロはBWSを再利用できなにか、ドッキング用の相互通信システムを呼び起こし、リンクを試みた。

すると、システムには緑のラインの上に「BWS Available (使用可能)」と書かれた文字が表示された。

「よし、まだ使えるみたいだ。ならば……」

アムロはBWSにリ・ガズイを接近させる。

「あれ？何をやる気なんだろう？なんか壊れた飛行機みたいなのが見えるけど。」

のび太はアムロがとった行動を理解できず、不思議がった。するとリ・ガズイはシャツを頭から着るかのようになり、BWSの下から潜り込んで合体した。リ・ガズイは一機の戦闘機になった。

「わ！ロボットが飛行機になった!!」

のび太もテレビのロボットアニメでこういったシーンを何度か目にしたことがあったので、目の前でそれが起こって感激した。ロボットアニメのロマンをくすぐられる光景だった。

「君たち。これで飛行機ができた。これで早く帰れるぞ。上に乗りたまえ。」

アムロの誘導で、のび太たちのジエガンはサーフボードに乗っかるような感じでBWS形態のリ・ガズイ上に乗った。

「よし、乗ったな？振り落とされるなよ。」

アムロはリ・ガズイをフルスロットルにし、一気に加速させた。モビルスーツとして動いていたリ・ガズイよりも断然速い。

「あわわわわわ!!」

「すごいG（重力加速度）だ!!」

のび太とドラえもんは、リ・ガズイの速度によってできたGに圧迫されていたが、何とか失神できずにいた。

ジエガンを乗せたり・ガズイはあつという間にファイフス・ルナを脱出したが。外は入ってきた時より真つ赤だった。もう大気圏突入寸前なのだ。

「間に合うか!？」

正直アムロも地球の重力圏に引っ張られないか心配だった。下手すれば重力圏に引っかかると抜け出せなくなってしまう、そのまま地球に落下し、流れ星となって燃え尽きてしまうだろう。が、めげずに脱出することに専念した。

ファイフス・ルナからはだんだん距離が離れていく。

「よし、そろそろいいかな。爆弾、発破!!」

ドラえもんは高性能爆弾のリモコンを取り出し、スイッチを押した。そして数秒ほどのタイムラグの後、ファイフス・ルナの動力部付近から、間欠泉のように一筋の光が噴き出るのが見えた。そして光の筋が2つ、3つ、4つとだんだん増えていき、やがて爆発した。

光は自分たちのところに届いていないように見えるが、それより早く見えない爆風がものすごい速度で、ジエガンとリ・ガズイを押し上げる感じで吹き飛ばす。

「うおおおおおおおっ!?」

後方からの爆風による追い風でリ・ガズイはさらに加速し、中のアムロは圧迫されていた。

「わーわわわーど、ドラえもんくん!!」

「ちよ、ちよっと威力強すぎたかな!」

ジェガンの中はかなり揺れていて、のび太は逃げ切る前に壊れるんじゃないかと不安になっていた。

幸いにもこのフィフス・ルナの爆風により、重力圏に飲み込まれかけていたり・ガズイたちは脱出に成功し、地球に落下する危機からは免れた。

安全を確認すると、リ・ガズイのアムロは後方を確認し、フィフス・ルナが大気圏寸前で爆破四散していく様を目にした。

「本当に爆破したのか。しかしこれでは……。」

アムロは先ほどのび太たちに説明した核の冬に危惧していた。ドラえもんは大丈夫とは言っていたが、それが確かなものでなければ、フィフス・ルナの細分化した破片はオゾン層に広がり蔓延し、空を覆いつくすことになるだろう。結果、逆効果になってしまう。

その時だった。

「な、なんだ!」

フィフス・ルナを中心に周辺から光の粒子のようなものが発生し始めた。

「何が起こってるの?」

「これが大丈夫と言ってた理由さ。」

予想外の光景に不思議がるのび太の隣でドラえもんは予想通りと
いった余裕の顔を見せていた。

「もしも大気圏前でファイフス・ルナを普通の爆弾で爆破していたら、あの
のモバイルスーツのパイロットさんが言ってたように、粉塵がオゾン層
……空を覆いつくして太陽を遮ってしまう。しかもそれは、軌道上に
引っかかってしまえば、下の地表に向かって落ちることもないからそ
の空の上でとどまって、なかなか晴れないものになる。」

ドラえもんは、爆発し光の粒子になりつつあるファイフス・ルナを指
して言う。

「それで今回僕が使った爆弾はね、今回みたいに誤って大気圏近で
大型の小惑星を爆破させてしまった時の為に、“スペース・デブリ”
処理機能が強化されているんだ。」

「スペース・デブリ?」

「宇宙のごみだよ。宇宙ではごみ一つだけで大事故につながることも
あるからね。」

宇宙空間に衛星やロケットの破片などのごみが発生すると、その軌
道に乗っかって地球の周りを回り続けるのだ。その何が問題な
のかというと、速度である。低軌道のところでもその速さは秒速約7
〜8 km。自動車の法定最高速度(日本国内で時速60 km。これを
秒速に直すと16.67 m。)の約400倍の速度なのだ。宇宙空間、
特に軌道上で仕事をするということは、そんな超高速物体が常に飛び
回っている中で自身の命を守りながら作業をしなければいけないと
いう、リスクに見舞われることになるのだ。当然激突すればもはや命
はないだろう。デブリが発生すればそれだけで一撃必殺の凶器とな
るのだ。

「で、話を戻すけど、このスペース・デブリ処理機能によって、オゾン層に粉塵が蔓延するようになったとしても、その砂ぼこりの一粒一粒が特殊なエネルギーの膜で覆われるんだ。成層圏付近で留まることがないように、軌道から自動で脱出して重力圏に吸い付いて速やかに下に落ちるようにね。光の粒子が出ているのはそのエネルギーのためなんだよ。」

「え？その砂が落ちてきたら、下が砂だらけになっちゃうじゃん。」

のび太の頭の中では、空から砂の雨が降ってくるイメージが描かれていた。

「砂は地面に到達する前に、大気圏の摩擦熱で燃え尽きて消えてなくなるよ。それが僕らがいつも見てる流れ星さ。」

流れ星の大きさは、実際砂粒ほどである。それが大気圏で燃え尽きて光って見えるのだ。

「これで、このフィフス・ルナの爆発で起こった砂ぼこりは空の上で留まることなく、みんな流れ星になって落ちて消えていく。太陽が遮られることはないよ。」

ドラえもんは、成層圏付近で光の粒子となって散り散りになっていくフィフス・ルナを丸で囲むように手を動かした。

「さあ、これだけの砂粒が下に落ちるんだ。ちよつと不謹慎だけど、流星群がみられるよ。」

ドラえもんの言うとおり、フィフス・ルナから発生した光の粒子の大群は、一つ一つが光線のような流れ星となって、地球に降り注いだ。どれだけあるかわからないほどの砂粒一つ一つが束になって流れることで、軌道上から流星群が降り注ぐ様となって見える。

流れ星はドラえもんの言う通り地表に到達することなく、燃え尽きて消えていく。まさに、流れ星は一瞬の出来事を改めて証明するかのよう。

・・・

そして、ファイフス・ルナから光があふれている光景は、ロンデニオン行きシャトルからも見えた。

「すごいきれい……!!あれ全部流れ星かしら!？」

しずかはファイフス・ルナの光に見とれていた。

「幻想的だな……生きているうちに宇宙でこんなものがみられるなんて。」

ハサウェイは驚きと感激を同時に味わっていた。

「……もう奇跡よこれ。隕石が突っ込んで終わりっと思ったら、こんなことになるなんて……。」

「映画みてえだ。」

クエスとジャイアンも先ほどのパニックがあたかもなかったように、窓の外を見つめた。

「た、助かったの僕たち……?」

スネ夫は窓の外を見ることなく、うずくまっている状態で安全確認のために顔を上げた。

「いいから見てみるよお前も!」

うずくまるスネ夫をじれったく思ったジャイアンは無理やりスネ夫を窓に近づけ、光あふれる成層圏の様子を見せた。

「うわー！映画みたい!!」

「さつき俺が言ったつっの！」

感激して見とれるスネ夫の頭にツツコミを入れるジャイアンだったが、スネ夫は感激のあまり、痛みを感じてる余裕はなかった。

そんなジャイアンたちの声を聞いたのか、ファイス・ルナの接近に恐怖し身をかがめていたほかの船客も、次々と窓の外を見て、ロマンに浸っていった。

ただ一人、未だ恐怖で身をかがめ神頼みをするクエスの父親アデナウアーを除いては。

・・・

「ファイス・ルナの破壊により、結果として地球への落下は阻止できた。しかも、大気圏付近で爆破させたにもかかわらず、核の冬までも回避した……ありえないほどの奇跡だ。」

あまりの予想外の出来事にアム口は感激と驚愕を同時に味わっていた。そんなありえないことを、見知らぬ年端も行かない少年たちがやってのけたことを、何よりも驚愕していた。

「こんなことをしでかすなんて……君たちは一体……!?!」

「ふふふ。そんな大したものじゃないですよ。」

驚愕するアム口を翻弄するかの様に、ドラえもんは不敵に笑った。

「僕はただ、何をやってもまるでダメなある少年を助けに、未来から

やってきたネコ型ロボットですよ。」

「まるでダメな少年って僕のこと!?!」

逃がさんとはかりののび太のツッコミがジエガンのコックピット内で響く中、前方から白い宇宙戦艦が見えてくるのが分かった。

第7話 ロンド・ベル隊

地球連邦軍外郭部隊ロンド・ベル隊の旗艦であり、砲撃戦能力とモビルスーツ運用能力を重視した、新たな連邦軍の主力艦艇、白いカラーが特徴のラー・カイラム。その艦の後方の着艦用甲板に、ジェガンを乗せたり・ガズイが着艦した。

リ・ガズイは流れるように艦内のドッグに入っていく、専用のハンガーにドッキングすることで止まった。リ・ガズイが止まることを確認すると周りにいた整備班たちがリ・ガズイに寄って来た。

「アムロ大尉、どうしたんですこのジェガンは!?!生き残りですか?」

整備員の一人、アストナージ・メドツソが、リ・ガズイからアムロが出てくるのを確認してから質問した。

「……みたいなものさ。アストナージ、中にいるのは一応お客さんだから、念のため救護班もスタンバらせておいてくれ。」

そういいながらアムロがコックピットハッチから飛ぶと、無重力の中をふわっと浮いた。

「お客さん?軍人じゃない誰かが乗ってるのかな?」

アストナージがり・ガズイからジェガンのほうに目をやると、ジェガンのハッチが開いた。中からのび太が出てきたのがアストナージの目に入った。

「子供!?!なんだ、また子供か!!」

アストナージはデジャブを覚えていた。

彼はロンド・ベル隊、ロンド・ベルに配属される前に、反連邦政府

組織エウーゴで整備士として所属していたことがあり、その時に未成年がモビルスーツを動かす光景を目にしたことがあるのだ。

のび太がジエガンから出入りする瞬間を見て、アストナージはその時のことを思い出していた。

「やれやれ。ジユドーの時と言い、なんでこうも子供が乗るモビルスーツに縁があるのかねえ。」

アストナージはその時持っていたスパナで頭をかいた。

「まあ、いいんじゃないかい？大の男が大半占めてるんだから、少しはドックも平和になるだろうよ。」

「ケーラさんよお、お前はガキどもがはしやぎまわる中で作業するしんどさが分からんだろうに。」

後ろから聞こえてきた金髪の女性兵士、ケーラの声にため息をつくアストナージ。

「ドラえもん。なにしてんのさ、早くいくよー?」

ジエガンから一番に出たのび太は、ドラえもんが残っている後ろのジエガンのコックピットに声をかけた。

「待つて待つて。すぐ行く。」

そういうとドラえもんはハッチから顔を出した。その様子がアストナージの目に入ると……。

「なんだありや!?子供の次はタヌキか!?どういう取り合わせだ!」

「僕はタヌキじゃない!!ネコ型ロボット!!」

ドラえもんがタヌキと言われている、おなじみのパターンである。

「ネコ型……見えるようなそうでもないような……。」

自身の言う猫の基準にドラえもんはなかなか当てはまらなかったのか、ケーラはドラえもんを猫としてとらえるのに少し迷った。

「君たち、こつちだ。」

アムロはジエガンから出てきたのび太とドラえもんを確認すると、手招きした。

のび太とドラえもんは手招きするアムロのほうに向かっていった。

「本当に子供が乗っていたんだな……あと一人は、ロボットらしいが。」

モビルスーツを降りてからは初対面となるアムロとのび太とドラえもん。

アムロはまじまじと二人を見た。特にドラえもんのほうは、自身が今まで見たことのないものなので、あまりの珍しさに見ている時間が長かった。

「これから僕らはどうなるんでしょう？…えつとその……。」

「ああ、まだ名乗ってなかったな。俺はアムロ。アムロ・レイだ。このロンド・ベル隊で大尉としてモビルスーツに乗っている。」

アムロは後ろでダメージを修理されているリ・ガズイを指さしながら自己紹介した。

それにつられてのび太とドラえもんも自己紹介する。

「野比のび太です。小学5年生です。」

「僕ドラえもんです。アムロ大尉、先ほどは助けていただいて、ありがとうございます。」

「なんの。君たちがいなければ、ファイフスはあのまま地球に落ちて、シヤアにやられるのを見ていただけだった。」

アムロはのび太とドラえもんの順に握手を交わした。

「小学生か……本当に若い子供が乗っていたとは。まあそれもひつくるめて聞きたいことは山ほどあるが……。」

といってアムロがドラえもんたちに質問しようとする、艦内放送の呼び出し音が鳴る。

『アムロ大尉。アムロ大尉。至急ブリッジにまで来てください。』

「……説明しなきゃいけないのは俺も一緒か。すまないが、君たちもついてきてくれ。」

アムロはのび太とドラえもんを案内するのも込めて、誘導しつつブリッジに向かった。

ブリッジに入ると、慌ただしい喧噪で包まれていた。

「戻ったか、アムロ。」

ブリッジで先に声をかけたのは、艦長のブライト・ノアだった。

「ブライト、こっちもいろいろ説明……および報告しないといけないことがある。」

「ああ、では聞かせてもらおうか。突然消えたファイフス・ルナについてな。」

まずアムロは戦況報告を行い、その中で自身が目撃したファイフス・

ルナが光の粒子となって爆破四散した結果について、ことの顛末を告げた。

「……話だけを聞くと、本当に小説か漫画みたいな話だ。アムロかそのほかのニュータイプじゃなかったら、一年戦争のときみたくまたヒスを起こしてぶん殴ってたかもしれん。」

最後の言葉に少し過敏に反応したのび太だった。ぶん殴るといふ暴力的なことは日ごろからジャイアンにやられていたので、癖になっていた。

「だが現実になった。それを今から説明する。この二人についてな。」

のび太とドラえもんはアムロの前に出た。

「艦長のブライト・ノアだ。よろしく頼む。」

「ドラえもんです。えっと、信じてもらえるかどうかはわかりませんが……。」

(……ロボットと言っていたが、ハロの系統か?)

ドラえもんは、自身が未来から来たネコ型ロボットであること。その未来に存在する道具を使ってファイブス・ルナの落下を阻止したことを説明した。

この戦いにより関係がなさそうなドラえもんと のび太が、なぜファイブス・ルナを止めに来たのかという理由として、自分たちの住んでいる未来の世界が消えかかっている、このファイブス・ルナの落下およびシヤアの反乱が何か関係しているかもしれないということを告げた。

「未来の世界が消えかかっている、タイムパラドックスか。ますます小説だな。にわかには信じがたいところだが、現にファイブス・ルナがあ

あやつて派手に消滅したのを目にしてしまったのもある。」

ブライトは頭の中がごっちゃになっていた。にわかには信じられない思いと、信じられないものが実現し、それが結果をだしてしまったために認めざるを得ないことが交錯しているのだ。

「その未来の消滅に、シャアの動きが関わっているとはな。」

「それで、ブライト艦長。 ” アクシズ ” に何か心当たりはないですか？」

取り付く島を得たかのように、ブライトはドラえもんのアクシズの言葉に反応した。

「アクシズと言えば、旧ジオン公国軍がアステロイドベルトにて資源採掘用として開拓した小惑星のことだ。中継基地として使われていたが、当時の戦争が激化するにつれて、要塞に改造されていったものだ。」

ブライトはブリッジから展望できる宇宙空間の遠くのほうを見た。

「ドラえもん君、アクシズがどうかしたのかい？それがもしやシャア……未来の消滅に？」

アムロがドラえもんを後ろから覗き込むように質問してきた。

「はい、実は……。」

ドラえもんは、未来の消滅の際に、歴史書の最後にアクシズの文字が書かれていたことを伝えようとしたその時だった。遮るようにラー・カイラムの通信が入るベルが鳴った。

「艦長、アナハイムより入電。アムロ大尉に、例の件に関してです。」
「繋いでくれ。」

話の途中だったが、ブライトは迷わず通信のほうに耳を向けた。
ブリッジの通信用モニターのスクリーンには、ケーラとは違う金髪の女性の顔が映った。

「あ、つながったつながった。アムロ、聞こえる？」

「ベルトーチカ・イルマか!!」

返事をするようにアムロは反応した。

「きれいな人だなー。」

「あら？見かけないかわいらしいお客さんね。」

自身に見とれているのび太にベルトーチカは気づいた。

「彼らはのび太君とドラえもん君だ。諸事情があつて今ロンド・ベルでかくまっている。」

「……つくづく思うが、うちはほんと託児所じゃないんだがな。」

ベルトーチカにのび太たちを紹介するアムロの後ろで、ブライトはため息をついた。

のび太たちだけに限らず、ブライト・ノアが艦長として就任した船には、大体子供が乗っていることが多かったのだ。先ほどのアストナージの子供に縁がある話も、そこから来ていたりする。

「初めましてのび太君。ドラえもん君。私はベルトーチカ・イルマ。そこにいるアムロ大尉の〃（将来的な）お嫁さん〃よ。」

ベルトーチカの強調した発言により、アムロをはじめとしてブリッ

ジクルーは噴出した。

「え!?アムロ大尉、結婚してたんですか!？」

思わずのび太は真に受けて驚いた。

「ベル!余計な冗談はよせ!」

「あら冗談だなんてひどいわアムロ。私たちは深く愛し合ってもうずいぶん経つじゃないの。そんな日々を迎える中で、あんなことやこんなことも……あれも全部遊びだったというのね!？」

「ああ、もう!話をややこしくするな!」

ラー・カイラムのブリッジで繰り広げられるアムロとベルトーチカの夫婦漫才に、クルーからのクスクスという笑い声が響き始めた。

「……話はそこまでにして。アナハイムから直接かけてきたということは、”アレ”に関することじゃないのか!？」

「そうそう。ちよいと色々ややこしいこともあったりするから、もうアムロに直接見てもらったほうが早いと思ってね。」

先ほどのおちやらけた表情から、まじめな顔になるベルトーチカ。

「そうだな。シャアの動きが分からなくなった以上、警戒もかねて”アレ”の準備も急がねばな。ちようどいいからそっちに見に行くことにするよ。場合によってはその場で受け取ろうとも……。」

「じゃあオクトバーさんにもよろしく言っておくわ。ご飯とお風呂炊いて待ってるわねんダーリン♪」

「ベル!」

アムロが叱ろうとすると通信回線は切れ、モニターからベルトーチカの顔は消えた。

「……ブライト、月に行く。」

「そうだな。いつでも例のものが動けるようにしておいたほうがいい。」

アムロはそういうと、ブリッジを出て格納庫に向かおうとする。

「2年もかけて我々ロンド・ベルはすべてのコロニーを調査した。だが、シヤアが動いていることは、うわさですらも聞くことができなかった。その水面下で軍備ができていたとすれば、もはや悠長にはしていられないだろう。」

格納庫に通じる廊下を進むアムロの後ろでブライトが言う。

「じゃあなんで、シヤアが軍の準備をしているのが分からなかったんでしょう?」

ドラえもんが質問した。

「一般人がガードしちまうのさ……。」

「どうして!?地球がピンチだっていうのに!みんなの地球でしょ!」

のび太はブライトに訴えた。

「地球連邦政府は地球から宇宙を支配しているが、これを嫌っているスペースノイドは山ほどいる。」

「ああ、だからシヤアの味方をするんですね。」

「どういうこと?ドラえもん?」

「地球に住む人たちが、宇宙でコロニーに住む人たちがいじめるともいえるんだよ。思ったより地球と宇宙の関係は根深いみたいだ。」

「そんな……そんなことって……。」

正直、のび太の中では悲しいことであるとわかっている、事態のスケールのでかさに頭が追いついていけなかった。

そんなこんな話をしていると、アムロたちは格納庫に着いた。

「アストナージ。ゲタの用意はどうか？」

「外に用意してます！」

「下駄？下駄なんかどうするんだろう？」

アムロとアストナージの言うゲタの言葉にのび太は疑問を抱いた。

「……そうだ。君たちはどうしよう？ラー・カイラムも絶対安全とは言えないから、このまま月に行くついでにフォン・ブラウンにでも下したほうが安全じゃないのか？」

アムロはカタパルトデッキに降りる前に気が付いてドラえもんたちのほうを向いた。

「そうだな、ここはもはや戦場だ。いくら君たちが未来のこと知っているとはいえ民間人だ。様々な意味で失うわけにはいかない。」

「そうだ！僕たち民間人だった。」

ブライトの言葉に、自分たちの立場を思い出すドラえもん。

「え？ここにはいられないの？」

「モビルスーツを動かせるわけじゃないだろう？それを考えたら無理に前に出て戦うよりも、間接的に支援したほうがいいかもしれない。」

ブライトはのび太に提案した。

「そのことについては、追々相談することにしよう。君たちに助けら

れて、今後も協力してほしいのは事実だ。」

アムロはそう言いながら、カタパルトデッキのほうに降りた。そこには、平べったいデザインのモビルスーツ運搬用宇宙艇、ベースジャバーがあった。

「あれが……ゲタ？」

のび太にとって思っているゲタとは全くかけ離れたものが見えたことに、混乱した。

「あれはベースジャバーって言って、モビルスーツを乗つけて飛ぶものなんだ。モビルスーツって人型だろ？あの上に乗って立てば下駄をはいてるように見えるから、ゲタってみんな言うのさ。」

アストナージはベースジャバーを指さしてのび太に解説する。

「のび太君、ドラえもん君、乗りたまえ。まだ第2波はないはずだ。今のうちなら君たちを安全に送り届けられるだろう。」

アムロはベースジャバーのコックピットから顔を出しながらのび太たちを誘導した。のび太たちはアムロに誘導されるままにベースジャバーのコックピットに乗り込むと、キャノピーは閉ざされ、ベースジャバーの乗るリフトはカタパルトデッキまでスライドする。

宇宙空間が見えるところまで来ると、ベースジャバーは最大火力でのバーニアを吹かし、カタパルトから射出され、宇宙空間に飛び出た。ベースジャバーがラー・カイラムから出発して数分後、アムロは行き先を月のアナハイムに設定し、オートパイロットに切り替えた。

「月までは少し時間がかかる。それまでに睡眠でもとっておくとい
い。」

アムロはヘルメットをとりながら、隣の座席にいるのび太とドラえもんに告げた。その直後、アムロが座席を少し後ろに倒して寝床になると、すぐさま仮眠に入った。

「……もう寝ちゃった。この人も昼寝好きなのかな？」

「のび太君じゃないんだから。軍人さんなんだから、戦いとかしんどい仕事で疲れてるんだよ。」

「それを言ったら、僕だってしんどい毎日送ってるのに！」

のび太がしんどい毎日として連想したのは、毎日勉強ができずに先生に怒られ、学校が終わればジャイアンに追い掛け回され、家に帰ればママに0点の答案が見つかって大目玉。何も無いと思えばスネ夫に急に呼び出され自分では手に入らないものを自慢してくる、そんな日々の光景が頭に浮かんだ。

「だから君と一緒にするなって。」

「バカにしてー！」

思わずのび太は声を張り上げたが、直後寝ているアムロに気づいて、のび太とドラえもんは、互いに「しーっ」と静かにした。

「……だったら僕も寝ようかな。僕たちだってロボットと戦って疲れたんだし。」

のび太が寝ているアムロにつられてあくびして、自分も寝ようとしたその時。

「……のび太君、ちょっと話がある。」

「なんだよう人が寝ようとしたときに。」

ドラえもんが小声で話しかけてきたために、睡眠を遮られたのび太はうっとおしがつた。

「のび太君はこのアムロ・レイって人、どっかで見たことない？」
「アムロさんを？……あんまりわからないなあ。それがどうかしたの？」

のび太は横で寝ているアムロを見る。

「……のび太君は、“一年戦争”を知らないかい？」

「一年戦争？なにそれ？」

「……やっぱ知らないか。」

「……やっぱってなんだよ。」

のび太は自分が新聞を読んだりニュースを見たりしないため、時事問題には疎いことを自覚していたため、ドラえもんのやっぱという言葉に少し苛立った。

「この時代……新聞沙汰にもなつて、様々なところで話題になったほどの出来事なんだけど、えつと……今から12年ほど前かな。宇宙を舞台にした戦争があったんだ。」

「12年前……って、僕生まれてないじゃないか。」

のび太は指で自身の生誕を計算した。

「君が生まれる前に宇宙にはすでにコロニーが存在していたんだ。それも数多くね。その数多いうちの一つが代表して、“ジオン公国”を名乗って、地球連邦に戦争を仕掛けたんだ。」

「なんで今回のシャアといい、宇宙の人はみんな戦争したがるんだよ。宇宙にいるなら何でもできて自由じゃないか。」

「ブライト艦長も言ってたでしょ。宇宙に住んでいるからと言って何

でも自由ってわけじゃないし、みんな幸せじゃなかったんだ。実際は地球連邦政府がコロニー側が勝手な悪さをしないように監視するような形で支配していたんだ。それに不満を持って、ジオンはコロニー側の自治権、独立権を求めて、宣戦布告をして、戦いが始まったんだ。」

「自由が欲しくて独立したいだけだったら、何も今時戦争なんかしなくたって、話し合いで済ませばいいじゃない。」

のび太は負けじとドラえもんの解説に反発した。

「のび太君の言うとおり、それで済めば確かにいいんだけど、簡単に戦争がなくならないもんさ。」

「そこを何とかならないの!?!」

「じゃあのび太君。今までジャイアンに理不尽な暴力を強いられてきたわけだけど、僕が秘密道具を出したところで、ジャイアンのいじめはそれから一切なくなった?」

「そ、それは……」

「今後僕が秘密道具を出したところで、一切ジャイアンが暴力を振るわない平和な状態を作れるという根拠はどこにある?」

のび太は論破されてしまい、言葉が出なかった。

「人間の中にある闘争心と暴力衝動は、切っても切り離せないもんなんだ。だから戦争はなくなるらない。そういう話は、22世紀になってもたびたび議論されるくらいさ。」

ドラえもんはため息をついた。

「で、話を戻すけど、その一年戦争がどうしたかっていうとだ。その一年戦争では、とある二人の人物がいたんだ。一人は一年戦争を終結に導いたとされている地球連邦軍所属の英雄。もう一人は、ジオンに属するその英雄のライバルとなって、一年戦争の戦局を左右させた人物

だ。」

「英雄？ヒーローってわけ!?誰なのそれ!？」

のび太はやっと自分でもついていけそうな話題のキーワードが耳に入ったことで、元気になり食いついた。

「それが、アムロ・レイ……そう、そのアムロさんだよ。」

「アムロさんが、戦争を終わらせた!？」

のび太は事実には驚きつつ、もう一度アムロを見た。

「そんな戦争を、どうやって終わらせたのさ!？」

「一年戦争は戦艦による艦隊戦とモビルスーツによる機動戦が主だったんだ。アムロさんは、その時もモビルスーツのパイロットだった。アムロさんが乗るモビルスーツは敵ジオン軍のモビルスーツを何機も撃ち落として、ジオンを壊滅状態にまで押し込んだって言われている。まさにアムロさんはエースなんだ。」

「アムロさんが、そこまですごい人だなんて……で、なんかもう一人いるとか言ってたよね。」

のび太はアムロからドラえもんに視線を移した。

「……それが今回隕石を落とそうとした、シャア・アズナブルだよ。シャアはジオンにいたんだ。」

「ええっ!?じゃあその戦争の時のライバル同士が、また戦ってるってこと!？」

「もしかしたら、一年戦争の時のケリをつけようとしているのかもしれない。」

「それだけの為に、シャアは隕石を落とそうとしたってこと!?!?そんなあ、決闘なら1対1で人の迷惑が掛からないところでやればいいじゃない!？」

のび太にしては真つ当な正論だった。

「そうだね。もしシャアがそういうことをわかってやってたとしたら、また真意がわからなくなる。」

「それで話を戻すけど、アムロさんはその戦争のときになんていうモビルスーツに乗ってたの?」

「えっと、なんだったっけかなあ……名前はちよつと忘れちゃったけど。」

「ガンダムだよ。」

突如、寝ていたはずのアムロの声が聞こえたことでのび太とドラえもんは驚いた。二人はアムロのほうを見ると、アムロは目を覚ましていた。

「お、起きてたのアムロさん!」

「すみません、起こしちやったみたいで……。」

「いいさ。そろそろ月につく頃だろうしね。」

アムロがそう言うと、正面には月面最大都市、フォン・ブラウンが面する月が見えた。

「アムロさん、そのガンダムってどんなロボットなの? そんな軍を全滅させて、戦争終わらせるぐらいって……。」

「そんな大層なものでもないよ。基本的なところはそこら辺のジムやジエガンと変わらないさ。主力量産型と比べたら多少性能がいろいろいいさ。」

「でも、話だとアムロさんがガンダムで戦争を終わらせたみたい……。」

「メディアはそれだけじゃ物足りないと思って、オーバーに盛り付けるもんだ。ガンダムだって基本的にはライフルとサーベルを持たせ

て、敵に向かっっていくのは一緒だよ。それでほかの連邦のモビルスーツ乗りと同じように、いろんなところから飛んでくるザクを一機ずつ倒してただけさ。」

「それだけでもすごいと思いますが……。」

たいしたことなさそうにアムロは語るが、ドラえもんは驚いていた。

「僕一人でジオン全滅させるなんて、大層なことはしてないさ。ジオンに勝ったのも、僕だけじゃない連邦軍のみんなの力もあってこそその勝利だ。」

アムロはコックピットから別方向の宇宙を眺めた。アムロの視線の先にあるのは何も無い宇宙空間であるが、昔そこに何かがあったのを思い出すかのように。

「ガンダムかあ……どんな見かけしてるんだろう?」

「……ガンダムなら、これから見れるさ。」

アムロはそうとうとアクセルを踏んでベースジャバーを加速させ、一気に月に向かった。

第8話 レガンダムとどこかで見たモビルスーツ

月面都市フォン・ブラウンに構えるアナハイム・エレクトロニクスの工場。その搬入路に一機ベースジャバーが入ると、格納用のハンガーとドッキングし、ハンガーに引っ張られる形でベースジャバーは進んでいった。

進んだ先にはモビルスーツの製造ドックの入りが見える。その入り口で技師のオクトバーのそばでベースジャバーに向けて両腕を振るベルトーチカの姿があった。

やがてベースジャバーはベルトーチカたちの目の前に着陸し、コックピットから先にアムロが、続いてのび太とドラえもんが降りる。

「最新鋭機を寝る間も惜しんで組み立ててるっていうのに、ずいぶん遅い登場ねえ。アムロも随分偉くなったものね。アウドムラにいた時のへしやげてた誰かさんとは大違い。」

「ガンダムを君に任せつきりだったのは申し訳ないと思ってるよ。」

アムロと話すベルトーチカは、次に後ろののび太とドラえもんを目を向けた。

「ど、どうも……。」

ベルトーチカの美貌に少し緊張したのび太。

「うふふ……年相応のウブな反応ね。一年戦争の時のアムロもこうだったのかしらね?」

「ベル、よさないか。」

のび太からドラえもんに移した途端、ベルトーチカの表情は優しくも妖艶な顔からこの世界のものとは思えないようなものを見るような強張った目になった。

「……今じゃガンダム以外でもハ口とかいろんなロボットがいるけど、ほんとこの方は見たことないわね。」

「あはは……僕もいろいろ事情があるもので……。」

ドラえもんはお茶を濁した。正直もう初対面の人物に会うたびに自分が未来から来たネコ型ロボットであることをはじめとした複雑な事情をいちいち話すのがめんどくさかった。

「それよりベル、ガンダムは？」

「こつちよ。」

ベルトーチカが先導して、ガンダムが格納されているドックに向かった。

「それよりさアムロ、知ってた？アナハイムって、ネオ・ジオンのMSも建造してるみたいよ。」

「勘弁してください。我々技術部門は違いますよ。」

同行するオクトバーは弁解した。

「それが企業だもんな。それぐらいは想定できる。」

ドックに着くと、そこには一部だけ装甲が貼られていて、内部の整備が行われている。"モビルスーツ"が姿を見せた。

「あれが、ガンダム？」

のび太は建造中のガンダムを指さした。

「アムロさんはあれで英雄になったの？」

「いや、一年戦争のやつとは別物さ。」

「そうよ一緒にしないでよ。前のと比べてシヤアにも勝てるようにめちゃくちゃ強くした新しいガンダムなんだから！」

ベルトーチカは子供のようにムキになった。

「じゃあ、〃ニューガンダム〃てことですね!？」

「まさに！」

ベルトーチカはのび太のセリフにこたえるように指をパチンと鳴らした。

アムロはそんなやり取りにかまわず、ヅガンダムのほうにジャンプした。月面上の1/6の重力だからか、そのままふわっとガンダム胸部のコックピットに一直線に向かった。

「アムロー！サイコミュはシートの後ろにあるわ！」

ベルトーチカはヅガンダムに向かうアムロを追いかけるように呼び掛けた。アムロがコックピットに着くと、シートの椅子の後ろに回り込み、モニターのパネルの一部をはがした。中からは内部機器が露出した。

「敵の脳波をサイコミュで強化して受信できれば、対応は速くなるからね。」

アムロは露出した内部機器をいじり、点検していった。

「大尉それなんですけど、大尉のアイデアがヒントになって、うちの材質開発部がフレームの中に同じ性能を持つ物を内蔵したんです。」

「フレームの中に内蔵？」

「アムロ、私が呼んだのはそのことについてよ。」

ベルトーチカとオクトバーはアムロをコックピットから連れ出して、ドックの下にあるコンソール室に連れて行った。のび太は建造中のレガンダムに見とれていたが、ドラえもんは強制的にのび太を連れ出し、アムロたちと同じ場所に向かう。

コンソール室の画面には何かの拡大されたものが映し出されていた。

「このコンピュータ・チップが、言ってみれば金属粒子並みの大きさでフレームに封じ込めてあるんです。それで、このフレームにそれを使っています。」

「すごいアイデアじゃないか！」

アムロはコンソールに映し出されているものを見て驚いていた。後ろでのび太も見えていたが、なんのこっちゃというような顔になっていた。

「……ドラえもん、今はよくわからないけど、このレガンダムが今回の事件のカギになるのかな？」

「わからない。これで最悪の事態を回避できるなら、それに頼るしかない。」

「ほかにもなんかガンダムみたいな強そうなロボットってないのかな？ いっぱいいればシャアだって止められるだろうに。」

「僕たちは戦争しに来たんじゃないんだよ？ 数で押せばいい問題ってわけじゃ……。」

ドラえもんの制止も聞かず、のび太はドックのほうに勝手に走っていった。アムロたちはオクトバーの話に夢中でそれに気づかないでいた。

「ああ、のび太君。勝手に走り回っちゃだめだよ！」

ドラえもんはのび太を止めに追っかけた。のび太がガンダム以外にも整備で並んでいるジエガンなどのモビルスーツを走りながら見ていく。

すると、のび太はあるモビルスーツの前で足を止めた。そして、その先のモビルスーツを凝視する。

「どしたののび太君？」

「ドラえもん、これって……。」

のび太は視線の先にあるモビルスーツを指さした。そこにあったのは、今までのモビルスーツとは違い、“金色一色”で塗り固められたモビルスーツだった。

「うわーきんきらきんだ。こんなのが戦場に出たら目立つよ。」

「でもドラえもん。このロボット、どっかで見たことない？」

「え？これ？こんな金色のモビルスーツなんてうーん……。」

ドラえもんは今までであったことを思い出そうとする。

「……そうだ！ドラえもん、あれだよ!!」

のび太は思い出し、突然声を上げた。

「ほら、僕たちが“メカトピアの鉄人兵団”と戦った時に乗ったあのロボット……”ザンダクロス”だよ!!」

のび太の言うザンダクロスで、ドラえもんはようやくと思いついたことで、あつという感じの顔になったドラえもんだが、数秒後に元の疑念の顔になる。

「ああ！……でもザンダクロスって、こんな金色だったっけ？もっと赤白青の色だった気が……。」

「確かに違うけど、見てくれはそっくりだよ。この金色が白になったら、それこそ近い気が……。」

のび太は金色のザンダクロスをさらに指さした。

「なんか関係あるのかな？鉄人兵団と。」

「それはないよ。ただのそっくりさんだよきつと。でもこの金色の装甲と言い、いろいろな気になるなこれ。」

「百式がどうかしたの？」

金色のモビルスーツの目の前で問答するのび太とドラえもんの後ろから、突然聞こえた声に二人は驚いた。

「べ、ベルトーチカさん!？」

「このモビルスーツ、知ってるんですか!？」

「知ってるも何もめっちゃ有名よこれ。百式よ。」

ベルトーチカはこの金色のモビルスーツ、百式があたかも自分の所有物かのように紹介した。

「どうしてこれが金色なんでしょう?？」

「単純な話よ。これ作ったやつに興味よ。金色が趣味らしくって家も服もみんな金だっというらしいわ。最低でしょ。」

もう一度百式を指して質問するのび太に対してベルトーチカは即答した。

「……というのは冗談。この金色の装甲はビームコーティングよ。ビームライフルとかメガ粒子砲の攻撃を防いでくれるわけ。」

「ぎつきの戦闘で見かけたところ、実体の弾丸ってあまり飛んでませんでしたね。」

ドラえもんはドックの外の方角を見ながら先ほどのフィフス・ルナでの戦闘を思い出していた。

「で、のびくんやドラちゃんは、この百式が気になるわけ？」

「うん、似たようなロボットを前に見たことがあったから。」

「百式と似たロボット？ザクとかジムならともかく、これと似たロボットなんてあったかしらね？」

「それにこんな金色じゃなくて、白をベースに赤と青だった。」

「白ベースに赤青……トリコロール？ガンダムの色した百式ってこと!?!」

のび太の話にベルトーチカは素っ頓狂な声を上げた。

「ますます見たことないわね……いや、やろうと思えばありそうだけど。あるならぜひとも見てみたいわ。そんなぶっ飛んだ百式。」

「……ドラえもん、ザンダクロスの写真って、まだ残ってたっけ？」

「待って……あ、うまいこと残ってた。」

ドラえもんは四次元ポケットから一枚の写真を出した。写真にはザンダクロスの全身像と、その上に乗るのび太たちの写真だった。

ドラえもんはベルトーチカにザンダクロスの写真を手渡すと、ベルトーチカは珍しいものを見たかのように目を丸くした。

そして直後にベルトーチカは噴出した。

「あっはっはっはっは!!ほんとにトリコロールの百式だわ!……でも、なんか若干小さい感じがするわね。」

“冗談かと思ってたのにマジであったのかよ” みたいなおどろき

方をするベルトーチカ。ザンダクロスのデザインを堪能すると、ドラえもんに写真を返す。

「しっかしほんつとに見たことないわねこの百式は。どこで作られたとかわかる?」

「それはね、メカ……」

「のび太君!!」

ドラえもんはのび太がしゃべろうとするのを慌てて遮った。

「この人たちにメカトピアのことと言ってもわかんないよ。話がややこしくなる。」

「そ、そうかな……?」

のび太とドラえもんはベルトーチカに聞こえないようにひそひそと内緒話をした。

「なあに〜?目の前のお姉さん差し置いて内緒話だなんてイケズなこすとすんのね〜。」

ベルトーチカは慌てるのび太たちをからかう。

「ああ、すみませんどうも!!このモバイルスーツは、アナハイムエレクトロニクスの……そう、日本でアナハイムに縁のある会社でできたものを写したのなんです!!」

ドラえもんは何とかごまかした。

「アナハイムじゃない別の会社か……だったら直接そういった情報は回ってこないか。」

「はい!それも結構どマイナーな会社なもんで。……あ、それとこの

ロボット、ちよつと欠陥というか問題があったみたいだから、すぐに取り壊されましたけれど……。」

「なあ〜んだ、もうないんだ。生で見たかったなく。爆笑もんでしょこんなカラフルな百式とか。」

ベルトーチカは残念そうにため息をつくとき、もう一度百式のほうを見た。

「……ねえのびくんドラちゃん。いつそのことさア……。」「？」

「これつかって、〃そいつ〃を再現してみない？」

ベルトーチカは〃ものつすぐくニヤけつきながら〃百式を指さした。彼女の言うそいつとは、先ほどのザンダクロスの写真である。

(……なんだろう、ベルトーチカさん……。)

(……すっごい悪い顔してる……。)

のび太とドラえもんはベルトーチカのにやけ顔に悪い予感を覚えていた。

「オ・ク・ト・バーさん♪」

ベルトーチカは足早にサイコフレームの講義をしているオクトバーのもとに向かうと、精一杯わざとかわいらしくした声で呼びかけた。

「ど、どうされました？」

ベルトーチカのぶりっ子な振る舞いにちよつとひきつけるオクトバー。

「ちよお〜つとお願ひしたいことがあるんだけどなあ〜?」

相変わらずくねらせた雰囲気で攻め込むベルトーチカ。

「ベル。今大事な話しているんだ。からかうんじゃない。」

後ろにいたアムロがベルトーチカをたしなめた。

「え〜?そんなこと言ったって、私だって大事な話があるのにい〜。」

“お前がその顔をして大事な話をするときは大体碌なことがないだろう!”と聞いたげな渋い顔をするアムロ。

「大丈夫すぐ済むから〜!!」

「……まあ、サイコフレームに関する説明はほとんど済みましたから、お受けいたしますよ。」

「あれが欲しいのよ。」

ベルトーチカは百式のあるほうを指さした。

「はあ……スぺア用に保管してある百式ですか?あれをどうするつもりで?」

「決まってるじゃないの!!シヤアと戦うのに使うのよ!!」

「ベル、今の戦力基準では百式は力不足だろう。リ・ガズィを使っても立ち回りで手いっぱいだったんだ。それで百式とは……」

「今は緊急事態よ!・ロンド・ベルだつて今シヤアを倒しに行くのに猫の手の一つでも借りたい状況でしょうに!」

ベルトーチカはアムロのセリフを遮った。

「だから、ガンダムを作ったんだろう！君が担当したガンダムは、今頃になつてそんなに自信がないというつもりか!？」

「そういうことじゃないわよ！それはそれ、これはこれよ。ガンダムはちゃんとシヤアをぶつ倒せるぐらいに仕上げたんだから。百式はダメ押しよ！ダメ押し！」

ベルトーチカの力説を見てアムロは、

（ああ、こりやベルトーチカがこうなつたらてこでも動かないぞ……。つていうか無理に動かすと後で絶対面倒なことになる。）

と少し諦め気味になった。

「……費用はどうするつもりだ？」

「ジョン・バウアーさんに頑張ってもらいましょう！大丈夫、ちゃんとした理由さえ言えば首を縦に振ってくれるわよ！タカ派なんだから。」

「君は連邦軍のタカ派をなんだと思ってるんだ。」

アムロはベルトーチカの暴走ぶりにため息をついた。

「それで、ベルトーチカさん。百式をそのまま持って帰られるつもりで?。」

「ああ、ちよつと待つてオクトバーさん。あの百式をちよつとカスタマイズしてほしいのよ。」

「……ああ、そうでしょうね。この戦況で百式の武装は非力ですからね。わかりました。現在の戦況に合わせた武装を装備させて……」
「それもそうんだけど、ちよつと別にやってほしいことがあるのよ。」

ベルトーチカの依頼にオクトバーは、はあ。と答えた。

「ドラちゃんさつきの写真ある?」

「あ、はい。これを。」

ドラえもんはもう一度ザンダクロスの写真をベルトーチカに渡した。

「こういう風にしてほしいの。」

「……なんだこりや?」

オクトバーはザンダクロスの写真を見て、一瞬思考が止まった。

・
・
・

「ファイブ・ルナ落としの作戦は、ネオ・ジオン軍として初めての艦隊戦であった。この作戦で諸君らの働きを見せてもらい、感動している。」

スウィートウォーター付近に駐留しているネオ・ジオン艦隊の中心には、シャア・アズナブルの演説する様子のホログラフが映し出されていた。

「本日はこれらの作戦の締めくくりとして、追撃するロンド・ベルの艦隊に陽動をかけてもらう。単純な作戦ではあるが、無事任務を果たしてスウィートウォーターに帰投してもらいたい……以上!」

実際にシャアが演説している場所と思われるスウィートウォーターの一室では、演説が終わると同時にホログラフの機器の電源が落とされる。

「お疲れさまでした。」

ネオ・ジオンの文官カイザスが、拍手をする。

「……ほんとうにこれでは道化だよ。」

シヤアはマントを外しながらため息をついた。

「いや、ネオ・ジオンの総帥としてイメージ作戦をしませんとな。」

「それは承知している。だが、そうではない……。」

シヤアは答えたあともう一度ため息をついた。

「……あの事故ですか？」

「事故と片付けるにはあまりに不自然すぎる。突然の軌道のずれ、空中分解などで思った結果が得られなかったならまだわかる。しかし、ファイフスがああもきれいさっぱりなくなるものか？」

シヤアは声を荒立てずにはいたものの、ファイフス・ルナの突然の消失の不条理さに怒りを覚えずにはいられなかった。

「落ち着いてください大佐。ファイフス・ルナの落下があのような結果にはなりませんが、我々の戦いがあれで終わりではないのでしょうか。」

シヤアのそばにいたナナイがシヤアをなだめる。

「その結果の上で皆の士気を高めるためのこんな演説とは、皮肉にもほどがある。まさに道化以外何物でもない。」

シヤアは先ほどからため息が止まらなかった。

「ナナイ、もう正直に言うよ。あれは一体何なんだ？何が起こったと
いうのだ？」

「観測班にも現在調べさせておりますが、未だに何が起こったのか詳細は判明しておりません。しかし、消失の直前に何か爆発したような熱源が確認されました。」

「爆発？核。パルスエンジンの不調か？その誘爆か？」

「いえ、エンジンテストは入念に行いました。ありえないことは宣言させていただきます。蛇足ながら、ファイフス・ルナが地球に着弾した時に更なる衝撃を与えられるように、ファイフスの火薬庫に火薬などの引火性物質など詰めるだけ詰め込みましたが、こちらも途中でのアクシデントで爆発せず、地球への着弾時に爆発するように、チエツクは致しました。」

ナナイは書類を見ながら説明した。

「以上のことを考えると、何者かが詰め込んだ火薬の近辺に“爆弾”を仕掛けたというケースを考えれば、もしかすると今回の事態はあり得ることかと。」

「内部に潜入したものがいたということか？私もファイフスのダメ押し火薬を直々に確認はしたが、見慣れない起爆剤のようなものはなかった。だが、爆発に至っては落下コースに入っただけから爆発している。」

「シャアはナナイの持っていた観測の資料を手に取り、爆発時の写真を確認した。」

「かなりギリギリのところまで来ているな。」

「まさか、大佐が離脱した後のタイミングで潜入したということでしょうか？」

「考えればなかなか無茶な作戦だ。遠隔操作できるとしても、ここから脱出するのは至難の業だ。最悪自分もろともファイフス・ルナと共に

するつもりだったのだろうか。」

シヤアは窓から見える宇宙空間に目を向け、ファイフス・ルナが散つたであろう場所を見つめた。

「爆発させたのはわかった。とはいえ、積載した火薬だけで爆破させたとしても空中分解するので関の山だ。あんなにきれいさっぱりはなくならない。それをどう説明する?」

「それに関しては現在調査中で……」

「失礼します、大佐!!」

ナナイとシヤアの話中に、ギユネイが突然割って入ってきた。

「割って入るなギユネイ。私と大佐が話をしていることすらわからないのか?」

「申し訳ありません。ですが、今ファイフス・ルナの爆発に関する話を聞いていると、内部の潜入者に関して、心当たりがありましたので。」

「なんだと?」

「……ギユネイ、続けてくれ。」

ギユネイはファイフス・ルナで、自分がドラえもんとのび太が潜入し、爆弾を仕掛けているところを見た時の状況を説明した。

「……ギユネイ、それは本当の話か?」

ナナイはギユネイの報告を聞いて疑った。

「ノーマルスーツを着ていない生身の少年と青いタヌキのロボットだど?荒唐無稽すぎる。ものによっては上官侮辱にあたるぞ。」

「ナナイ。ギユネイも強化しているのだろう。どんな事情があるにせよ、でたらめを言うとは思えない。」

「しかし大佐、あの場でのファイフス・ルナへ民間人が入るには危険地帯になります。ありえません。」

「……いずれにせよ、不可思議な現象が起きつつあるのは確かだな。とにかく引き続き、例の陽動作戦を進めてくれ。」

シヤアは眉をひそめながらも次の仕事に移るべくその場を後にした。

「ホルスト。私も次の準備をする。今からはパイロットではなく、政治家シヤア・アズナブル……そうだな？」

シヤアは軍服からスーツに着替えるべく隣の部屋に入った。

第9話 ジオンの第2波

「敵が動きだしました!!」

「敵、モビルスーツ確認!モビルスーツ部隊、迎撃用意!!」

ラー・カイラムのブリッジが突如慌ただしくなった。

「どういうつもりだ?月とサイド1の中間で、シヤアめ!!」

ないと想定されていたネオ・ジオンの第2波が来るのが見えたからだ。ブライト及びロンド・ベルは意表を突かれた。

「やむをえない。アナハイムにいる、アムロを呼びだせ。戦闘ブリッジ、早く開くの!!」

ブリッジでは戦闘配備を展開しつつ、通信オペレーターはアナハイムに向けてアムロの呼び出しを送信した。

一方アナハイムでは、アムロは一刻も早くレガンダムを持って帰ろうとすべく、最終チェックを行っていた。

そんなアムロが作業するレガンダムのコックピットにベルトーチカが飛び込んでいった。

「どうした?」

「ラー・カイラムからよ。早く帰って来いって。」

ベルトーチカは紙面のラー・カイラムの伝令をアムロに手渡す。

「……シヤアの第二波が月の近くで?俺にはロンド・ベルに帰投しろ?……サイコミュ受信の調整終了!!」

アムロは伝令文を理解するや否や、調整に使っていたサイコミュ受

信器を取り外し、急いでリガンダムを動かそうとする。

「出るの？」

「でも、まだ終わっちゃあ……」

サイコミュの調整に付き添っていたメカニックの一人はセリフを言いきる前に、サイコミュの受信機をアムロからほぼ無理やり手渡された。

「火を入れる！」

通信用スピーカー越しにアムロは宣言した。

「やっぱそうなるよね!!じゃあブースターベッド、マストドライバーに回しとくわ!」

「任せた!!」

阿吽の呼吸なのか、ベルトーチカはアムロが何をしてほしいかを瞬時に読み取り、行動に映った。

そんなやり取りの一方、オクトバーはのび太とドラえもんたちのほうに付き添っていた。

例の百式だ。

「さあ、これでどうだろう？」

オクトバーはのび太とドラえもんに注文通りのカスタマイズがされた百式を見せる。

「うわっ!!ほんとにそっくり!!」

「遠くから見たらわからないな。」

のび太とドラえもんの目の前に立っている百式は、従来の金色ではなく、白をベースとした赤と青の混じったトリコロールのまさにガンダムカラーの百式だった。そう、ドラえもんたちの知るザンダクロスと同じ姿なのだ。

「さて、ベルトーチカ女史は、こんなもんを使って一体何をするのか、見当つかないけどね。」

「なにいつてんの！やることは一つでしょ!!」

ベルトーチカはブースターベッドを準備しようと走り回る中、オクトバーのセリフを聞いて答えた。

「裏切りヤローへの、嫌がらせよ!!」

そういつて、ベルトーチカはブースターベッドに向かって走っていった。

「……………ところで、これ、君たちが乗るの?」

オクトバーはザンダクロスの色をした百式を指さす。

「……………たぶんそうかと。」

「……………話の流れ……………というかあの人の想像上からして。」

のび太とドラえもんの返答を聞いて、オクトバーは頭の中でいろいろとツツコミどころ（主にベルトーチカに対して）が溢れかえっていたが、もう何かとめんどくさくなってきたので何も言わないことにした。

「そういうわけで、ブースターベッドは2機!!!」

ベルトーチカの2本の指がピースサインを彷彿させるようになって上
がった。

・・・

「なんて作戦だよ。モビルスーツは白兵戦がメインだったのに。」

ネオ・ジオンの主力とする宇宙軽巡洋艦ムサカ級のカタパルトデッキの上に立つ青いギラ・ドーガの中でパイロットのレズン・シユナイダーがぼやく。

「発進だぞ、レズン。戦場に行けば好きやつてるくせに！」

「あいよ。」

スピーカー越しに聞こえる誘導手の声に従って、レズンは自身のギラ・ドーガをムサカから発進させた。

それに続くようにほかのムサカ級からもギラ・ドーガの群れが飛び立っていく。

そんな布陣を展開するネオ・ジオンの艦隊の向かい側に位置するラー・カイラムでも、敵の襲撃に対抗すべく、モビルスーツ隊の展開が行われていた。

「リ・ガズイは使えないんだな？」

ジェガン隊パイロットの一人ケーラはジェガンに乗りながら整備班に聞く。

「修理、間に合いません!!」

「わかったよ。」

あまりの多忙さに激高しているかのような返事をするメカニック

に対しても落ち着いてケーラは返事し、ジエガンのコックピットハッチを閉めた。

ラー・カイラムから手持ち全てのジエガンが戦闘宙域に向かって飛び立っていった。

一方月では、ネオ・ジオンの第2波に間に合わせるべく、マスドライバーにはブースターベッドに四つん這いになって乗っているルガンダムが発進しようとしていた。

「カウントダウン、良好です。」

ルガンダムの通信スピーカーにはオクトバーの声が響いた。

「……ベルトーチカは例のもう1機に乗っているんだな？」

ルガンダムの中のアムロは通信機に向かって問う。

「ええ。のびくんたちのお守りをしてあげないと危ないでしょー!」

通信モニターには、カスタムされた百式に乗るベルトーチカとのび太とドラえもん姿が映し出されていた。

ベルトーチカの返答が聞こえると、もう一基のマスドライバーのほうでは並走するかのように同じくブースターベッドの上に乗るトリコロールの百式の姿があった。

「……伊達や酔狂にしか見えんな。」

ガンダムカラーの百式を見たアムロの感想がこれだった。

「のび太君たち、すまない。フォン・ブラウンに降ろすはずが降ろし損ねてしまった!」

「いえいえ、僕たちに協力できることがあれば、なんだってやりますよ！」

ドラえもんが返答した。

「ザンダクロスに乗った時とは雰囲気が違うなあ……!!」
「そりやそうさ。これはモビルスーツだもの。」

ぼやくのび太にドラえもんが突っ込んだ。

「おしやべりはそこまでよ。舌かむわよ!!」

ベルトーチカがそう言うと、レガンダムのブースターが点火し一気に加速して、マスドライバーから離陸していくのに続いて、百式も離陸すべく加速し始めた。

「ううううっ!!」

のび太とドラえもんはまたも加速のGに押さえつける感覚を味わう。間もなく百式を乗せたブースターベッドがマスドライバーから離れて、月を離れた。百式は宇宙空間に向かって飛んで行った。

月の引力圏から抜け出すと、百式の内部はほっとしたのか落ち着いた空気になった。

「……ところで、ベルトーチカさん。この百式?を持ち出すときに聞こえたんだけど、“嫌がらせ”って何のこと?」

「そういえば、裏切り者がどうか。ネオ・ジオンにそれっぽい人でもいるのかな?」

一番に質問したのび太につられるようにドラえもんも質問する。

「……君たちさ、この百式つてもともと誰が乗っていたと思う？」

ベルトーチカの質問返しに、のび太とドラえもんは首を傾げた。

「この百式にはね……シヤアが乗っていたのよ。」

「シヤアが!?あの、ネオ・ジオンの!?!」

ベルトーチカから告げられた真実にのび太は驚いた。

「シヤアも一回はね、アムロと共闘したことがあったのよ。その時に乗っていたのがこの百式なの。」

「裏切者って、そういうことだったんだ。」

ドラえもんは納得した。

「でも、ザンダクロスの色にすることが、なんで嫌がらせなのさ?」

「どんな事情であれ、シヤアにとってガンダムはね、なかなか因縁があるのよ。幾度となく自分の前に立ちはだかった存在だから。」

ベルトーチカは昔話を語るかのような口ぶりだった。

「自分が過去に乗っていたそんな機体が忌まわしいものの色になってもちろん敵として再び目の前に現れるのよ。嫌がらせ以外他にないわ。くくく……。」

ベルトーチカがもう一度見せる悪い顔にのび太たちはうわあ……とひきつった。

「それにオクトバーさんも太っ腹ねえ。百式が貧弱だから、“ハイパーメガライフル”持たせてくれたわ。」

ベルトーチカはコンソールを操作して、装備品をチェックした。

「それできあ、今気になったんだけどねお姉さん。」

ベルトーチカの突然のセリフに、のび太たちは反応した。

「このモビルスーツの名前、百式で行くつもり？結構カスタマイズしたから、いっそ名前も変えてもいいんじゃないかとかも思ったけど。」
「名前か……百式とか言われてもピンとこないしなあ……。かといってザンダクロスの名前にするにはちよつと違うところが何個かあるし……。」

のび太は悩んだ。

「……じゃあ、二つ合体させて、“X(クロス)式”っていうはどうかしら？」

「X(クロス)式い!？」

「そう。ザンダクロスからクロスをとって、Xに変えて、百式から式をとって、X式！」

「すごいとりあわせ。」

ベルトーチカの発想に少し驚くドラえもん。

「というわけでこの子の名前はX式で決定！異論は認めませう!!さあX式よ！大いなる星の海原に向かっていざ進めー!!」

「なんかもう仕切られてるなあ……。」

「なんで僕らが仕切られてるんだらう……?」

一人の女王様に尻を敷かれる二人の少年とロボットというシュールな光景が百式もといX式のコックピット内で繰り広げられていた。

・・・

ネオ・ジオンとロンド・ベルによる戦闘区域の近くにて流れる一機のロンデニオン行きのシャトル。そのシャトルの外壁に二人のノーマルスーツを着た飛行士（クルー）がシャトルの修理に回っていた。ファイブス・ルナを横切る際に損傷が発生してしまい、このまま航行するには危険な状態となっていた。

「なんだよあの光？あれあれ。」

修理していたクルーの一人が閃光がする方向を指さした。その光は戦闘による爆発であることが、数秒後クルーには分かった。

「よけろよけろ!!戦争やってんぞ!!」

気が付いたクルーはコックピットに回り込み、窓をたたいて危機を知らせた。

「ありや!?!」

クルーの警告を聞いたシャトルの船長が前方を確認すると、光の爆発が次々と起こっているのが見えた。

「アポジモーター早く直せって言ったろ!!でなきやこのまま突っ込むぞ!!」

「そんなあ!!神様アーっ!!」

シャトルの危機に嘆くクルーのそばを、1機のギラ・ドーガがすれ違った。その衝撃で外壁のクルーが少し吹き飛ばされた。

その様は、近くの席に座っていた乗客にも見えた。

「今のはモビルスーツ!?戦争やってるみたいよ!!」

クエスたちである。

「ネオ・ジオンか!？」

アデナウアーがそう言うと、速やかに席を離れコックピットへのドアに近づいた。そして直後に激しくドアをたたき始めた。

「民間機の信号を上げるんだよ!!キャプテン、やってるのか!？」

ドアの向こうにいる機長に対してアデナウアーは怒号を上げ始めた。そんな余裕のない姿を見たほかの乗客も次々不安になり、フィフス・ルナが接近した時のように再びうずくまり始めた。

「もうなんだよこれ!!隕石の次はロボットの戦争!?ママーっ!!!」

フィフス・ルナの危機が去って落ち着いていたスネ夫も再び喚きだし始めた。

「ちくしょう!なんだってこんなところでおっぱじめるんだよ!!こっちに当たったらどうするんだっての!!」

ジャイアンは窓から見える戦闘区域に向かって激高した。

「私たち、どうなるのかしら……!？」

「こうなったら、もうなるようにしかならないよ。」

不安がるしずかをハサウェイは慰めた。

「こんな時にいたら……のび太さん……ドラちゃん……!!」

危機が迫る中しずかは、今はそばにいない友人を思ってたただ祈り続けた。

一方戦闘区域に近づきつつあるレガンダムを駆るアムロにも、戦闘の様子が肉眼でも見えてきた。

「なんだ民間機か!? 戦闘区域を突っ切ろうとしているのか!？」

その戦闘区域の中を通過しようとするシャトルの存在にアムロは気が付いた。さらにその民間シャトルに敵のモビルスーツが意図せず近づこうとしているのも見えた。

アムロはレガンダムのライフルを速やかに構え、ギラ・ドーガとシャトルの間に照準を構えた。そして距離が縮まる前に、ビームライフルのトリガーを引いて遠距離狙撃用の高出力のビームを発射した。放たれたビームは衰えることなく、戦闘区域に向かって飛んでいき、ギラ・ドーガ隊をかすめた。

「なにっ!？」

シャトルに近づきつつあったのはレズンのギラ・ドーガだった。レガンダムのビームを寸でのところで回避した。そしてもう一発レガンダムのビームが飛んでくる。

「援護の艦隊か!？」

レガンダムのビームの出力の高さは、戦艦の火力と誤認させるほどのものだった。

「あれか、データにない機体だ」

レズンのギラ・ドーガのレーダーはようやくやっとレガンダムをとらえることができた。望遠モニターでレガンダムの姿が映し出される。

「……!!」

そんなリガンダムの後ろからついてきたX式に乗るのび太は、妙な感覚を覚えていた。のび太はその感覚に従って前を見ると、まだ肉眼では見えないものの、のび太の脳裏には戦闘区域を突っ切ろうとする民間のシャトルの光景が何となく見えた。

「なんでシャトルが見えるんだろう……?」

のび太は脳裏に映るシャトルをさらに見続けていると……

(……のび太さん……ドラちゃん……!)

聞き覚えのあるしずかの声がのび太の脳に直接響いた。

のび太はその声に従ってシャトル窓を見ていると、シャトルの窓から怖がってうずくまっているしずかの姿が見えた。

「しずかちゃん!? しずかちゃんが!」

「どうしたののび太君!」

急にのび太が大声を出したためかびっくりするドラえもん。

「あの向こうのシャトルに、しずかちゃんがいるんだよ!!」

「なんでそんなことわかるんだよ!」

「見えたんだ!! それに、しずかちゃんもスネ夫たちとロンゲニオンに行くって言ってたから、そのシャトルだよ!!」

のび太の言うことにドラえもんはしたがって前方を見てみたが、肉眼でははっきりと見えない。

「シャトルなんてどこにあるのさ?」

「今、レーダーに映ったわ。かなり前方のほうだけど。」

座席後方にいるベルトーチカは、のび太たちにシャトルの位置を告げる。

「あーシャトルにロボットが!!」

のび太の脳裏には、シャトルに正面から再び近づきつつあるギラ・ドーガの光景が見えた。もたもたしていると、今度はシャトルと衝突してしまいかねない。

「しずかちゃんがあぶない!!」

しずかの危機を感知したのび太はX式の持つハイパーメガライフルを構えた。

「の、のびくん!?何をやる気!?!」

のび太のとっさの動きにベルトーチカは驚いた。

そしてのび太は脳裏に映っている光景に従ってライフルの照準を合わせた。

「……どっかいけーっ!!!」

のび太は躊躇なしにX式のハイパーメガライフルの引き金を引いた。ライフルからはリガンダム以上の威力出力のビームが放たれた。このビームも衰えることなく前方の戦闘区域に向かって飛んで行った。

「なんだ!?!」

νガンダムの後ろから濁流のようなビームが流れて通過していくのがアムロにも見えた。νガンダムを抜き去ったX式のビームは、シャトルに近づきつつあるギラ・ドーガの下方をかすめた。しかし、かすめたはずなのにその衝撃だけでギラ・ドーガの脚部が爆発した。

「援護の戦艦がまだあるのかい!？」

レズンのギラ・ドーガは脚部を破損した僚機のギラ・ドーガの手を掴み、救助する。

「予定より早いが、後退する!!あの火力は危険だ!!」

レズンは負傷したギラドーガを引きずって、後退信号を出す他の部隊とともに後退していった。

「退いていく……鮮やかだな。なんだあの引き際の良さは？」

速やかに撤退していくギラ・ドーガ隊に疑念を抱くアムロ。

「それに……今の攻撃はのび太君が!？」

アムロは後ろのほうに目をやると、ライフルを構えたまま固まっているX式の姿があった。

すると、νガンダムに通信が入った。

「……アムロ、今のびくんが撃つただけど、どうなった？」

X式にいるベルトーチカからだった。

「……直撃はしなかった。だが衝撃で敵機の足が吹っ飛んでたよ。」

アムロは目の前で起こったことをありのまま伝えた。

「あ……あ……!!」

X式にいるのび太は撃った衝撃か、放心状態になっていた。

「……すごい。のびくん、遠くの敵を退けちゃったわよ?」

ベルトーチカは思わず拍手した。

「のび太君は射撃が得意なのは知ってたけど、ここまでするなんて……!!」

予想外の結果にドラえもんは驚いていた。

「……そうだ!しずかちゃん!!」

我に返ったのび太は、X式をシャトルのほうに無我夢中で急がせた。

「ちよ、のびくん急に動かないでよ!!」

のび太のとっさの動きにバランス崩したベルトーチカだった。

・
・
・

ネオ・ジオンが後退したため戦闘は終わり、シャトルのほうは落ちて着いていた。静寂となっているシャトルのそばをリガンダムが通るのがシャトルの客席からも見えた。

「ガンダム！」

ハサウエイがいち早く反応した。

「あのロボット、味方なんですか？」

しずかはハサウエイに聞いた。

「ガンダムだ！あれガンダムだよ！！やった！僕たちを助けに来てくれたんだ！！」

さつきまで泣きわめいていたスネ夫は、窓の外のレガンダムを見るなりはしやぎだした。

「泣いたりはやいだりいそがしいやつ！」

ジャイアンは珍しくスネ夫の行動に呆れていた。

すると、レガンダムが飛ぶそばから、急接近してくるモビルスーツがあった。X式だ。

「なんだ!?まだモビルスーツが近づいてくるぞ!!」

「うわあああーっ!!」

シャトルの客席は再びパニックになるが、X式は寸でのところで止まり、いきなりシャトルの外壁にとりついた。もちろん衝撃があったためにシャトルは揺れて、さらに中はパニックになる。稼働する巨大ロボが目の前にいる光景は乗客にとっては心臓に悪かった。

「しずかちゃん！大丈夫!？」

客席のスピーカー越しにのび太の声が聞こえてきた。

「その声はのび太さん!？」

しずかはのび太の声を聞くや否や、うずくまった体制から立ち上がった。

「そう！僕だよ！のび太だよ!!よかった無事で!!」

「の、のび太ーっ!？」

「なんでそんなもんに乗ってんだよ!!またドラえもんの道具か!？」

ジャイアンは驚き、スネ夫はのび太にX式について訴えかけた。

「のび太君、いきなりシャトルにとりついてどうするの!!中の人たちがケガするじゃないか!」

「ご、ごめんつい……。」

「いいから、離れて離れて。」

のび太はドラえもんに従うままX式をシャトルから少し離れた。

「これでよーし。」

のび太は離れたことを確認した。

「あれま?このロボットって、鉄人兵団と戦った時のロボットじゃないかー!」

X式のデザインにいち早く気付くスネ夫。

「ほんとだ。どっかで見たことあると思った。」

「のび太さん、いったいどうしたのそれ?」

続いてジャイアンとシズかもX式に食いついた。

「まあ、これは色々とあつて……。」

「のび太君。シャトルの中の人たちを先に助けようよ。」

ドラえもんはことはいきさつを説明しようとするのび太を遮り、シャトルの救助を優先させた。

一方、X式の姿が気になっていたのは、ドラえもんたち一行だけではない。

「あれって……百式……だよな？」

「でも派手な色してるわね。ガンダムでもまねてるのかしら？」

ハサウェイとクエスもX式が気になっていた。

第10話 全員集合

「ここから奥には入らないでください。」

戦闘区域にいたロンデニオン行きのシャトルは、 Rond・ベル隊のラー・カイラムによって保護され、乗客の受け入れ作業を行っていた。

「士官食堂からは出ないで。」

「靴は、足を床に押し付けるようにして、ほら。ん？」

士官食堂への誘導は思ったよりスムーズにいかない。大抵の乗客が無重力に慣れておらず、ラー・カイラムのクルーが乗客を抑えながら目的の場所へと流すようにしていた。

わたわたと無重力の廊下を進む乗客の行列の中にジャイアン、スネ夫、しずかの3人の姿もしっかりあった。

「ひえ〜っ。ドラえもんと一緒に何度か宇宙に行ったことあるけど、この感覚は慣れねえなあ。」

「日常的に宇宙にいるわけじゃないんですもの。でも、いつか未来になったら、こういうのも普通になるのかしら？」

ジャイアンとしずかもラー・カイラムクルーの指示に従い、よたよたと慎重に足を踏みしめながら進んだ。

「この無重力もほんとは楽しんでるはずなのに……はあくあ。とんだ宇宙旅行だ。」

旅行の想定外のトラブルにへきえきとし、疲れの表情を見せながら行列に紛れ込むように進むスネ夫。

その誘導作業の様子を見に、ブライトが姿を見せた。

「状況はどうか？」

「艦長、この分だともう少しかかりそうですよ。」

進捗の遅さに、見えない程度に小さくため息をつくブライト。そしてもう一度乗客の行列を見ると……

「……ハサウエイ!？」

自分の息子のハサウエイの姿が目に入った。

「父さん!!」

ハサウエイが父ブライトの呼びかけに反応し、条件反射でブライトの方に向いて行列から離れた。思わず体が動いたからか、ハサウエイの体は廊下の床から離れてしまい、宙を転がるかのように浮いてしまう。宙を舞うハサウエイは天井に衝突、そのままスーパーボールのように反射してうまくことブライトのもとに流れた。そのまま流れてきたハサウエイをブライトは受け止める。

「お前、どうしてシャトルに乗っていたんだ!？」

「隕石が降ってくるからそれで逃げてきて……それに父さんがこの船の艦長だなんて。」

「母さんとチエーミンは!？」

「……僕だけうまく乗れたんだ……あ。あの人のおかげで。」

ハサウエイが後ろから来たアデナウアーの方を指す。

「艦長。感激の対面中、申し訳ないが。」

アデナウアーはブライトとハサウエイの間を割って入った。

「……参謀次官殿で？」

「そうだ。この船をロンデニオンに向けてくれ。特命を受けている。」

アデナウアーはそう言って懐から命令書らしき書類をブライトにしか見えないように見せた。ブライトは命令書を受け取ると、“あゝあ、悪い予感的中したよ。”と言いたげなところを何とか押し殺すような何とも言えない顔になった。

実を言うとブライトはこの行列を見に来る前に、アデナウアーがシャトルに乗っていることは知っていた。シャトルの乗客のリストを確認しており、その中にアデナウアー・パラヤ参謀次官の名前が載っているのを目にしていた。そんな軍のお偉いさんが乗っていれば当然優先保護対象となるので、姿を確認しておかなければいけないと思い、ブライトはここに来たというのもあったのだ。

ブライトにとってこういうことは正直言って、かなり面倒なことだった。

「ハサウエイ、食堂に行っていないさい。事情は後で聞かせてもらう。」

「は、はい。」

ハサウエイは、これは自分がいちやまずい雰囲気と捉えると、そそくさとシャトル乗客の列に戻っていった。

そんなシャトルの乗客の待機場所である士官食堂では、シャトル乗客でにぎわっており、これからどうなるのかと不安でどよめいているのが大半だった。

そんな中、士官食堂の出入り口のドアが開くと、そこにはのび太とドラえもん姿があった。出入り口近くのシャトルの乗客は一斉に彼らを見たが、ラー・カイラムクルーじやない子供だとわかるや否や、出入り口から、なんだ違うのかと言わんばかりに目をそらす。

のび太とドラえもんはあたりを見渡すと、奥のほうにせずか、ジャイアン、スネ夫の姿があった。

「しずかちゃん!!」

のび太は知っている顔ぶれが目に入るや否や、思わずでかい声で呼びかけ、のび太の声にしずかたち一同は反応し、声の方に顔を向ける。

「のびたさん!」

「ドラえもん!!」

しずかはこのび太の姿を見て、ジャイアンとスネ夫はドラえもんの姿を見て、安堵の気持ちを得た。

「やあやあ、みんな無事でよかったよ。」

のび太とドラえもんはしずかたちの方に駆け寄った。

「これでいつものみんなが揃ったわね!!」

「ほんと、やっぱこういうパターンになるよな。いくらこのび太を入れてなくても、ドラえもんのおかげで結局追いついてくるんだもん。」

しずかがいつもの光景に安心する顔を見せるそばで、はあやれやれとスネ夫は憎まれ口をたたく。

「おめえその割にはドラえもんとこのび太が来た時には、ひやく助かった」 つつてうれし泣きしてたじゃねーか。」

ジャイアンはシャトルに乗っていた数時間前のことをネタにスネ夫を突つく。

「みんな、積もる話はあると思うけど、ここでそろったのも何かの縁だ。ちよつと話を聞いてほしい。こつちだ。」

ドラえもんはあえて安心の空気を断ち切り、厳かな声でさらに奥のほうへ4人を誘導した。そこには人は集まっておらず、内緒話をするにはうってつけだった。

一同が席に着くと、ドラえもんとのび太は、突然ドラミをはじめ未来とのやり取りができなくなったこと、未来が消え始めたこと、ひみつ道具がいくつか消滅していつていること、その原因がシャアの隕石落としが関係しているのではないかという推測など、今までであったことの顛末を説明した。

「……それじゃあ、未来がなくなっただってこと?」

スネ夫は声と手を震わせながらドラえもんを確認するのに対し、ドラえもんは無言で頷いた。

「それじゃあ、このままじゃドラちゃんも消えちゃうってことじゃないの!」

「最悪の場合は……。」

「消える!?!ドラえもんが!?!」

一番声を張り上げたのはのび太だった。

「そりやそうだ!未来が消えてなくなっただろう?その影響でひみつ道具が消えたんなら、ドラえもんだって消えて当たり前じゃないか。ドラえもんだって未来の存在なんだし。」

のび太にとってスネ夫の突込みはまさに鋭いものだった。

「ただ消えるにしても、今まで消えた道具みたいにタイムラグみたいなものがあるから、幸いまだ消えずにはいられるみたいだけど……僕自身もいつ消えてしまうか……。」

フェードアウトするようにドラえもんの口調は暗くなっていった。

「そんな！ドラえもんが消えてしまったら、どうすればいいんだよ!!」
「落ち着いてのび太さん！ドラちゃんに当たったって仕方ないじゃない。」

パニックになりながらドラえもんを揺さぶるのび太をしずかはやなだめた。

「とにかく最善の策としては、まだ僕が消えてしまう前にこの事態を解決することだ。とはいえ……何が原因で未来が消えてしまうのか、はつきりとはわからないけど、このシヤア・アズナブルが起こした動乱が何か関係しているかもしれないとみている。」

「……ん、まてよ!?!ドラえもんは未来から来てるんだよね!?!だったらこれから先に起こることだってわかるんじゃないの!?!」

スネ夫は厳かにふるまっているドラえもんを指さした。

「今話題になってるシヤア・アズナブルは、一年戦争のおかげでかなりの有名人になったんだよ？一年戦争は僕らの生まれる前の出来事だから、今ある新聞やニュース、戦争物の資料には大体出てくる。それが未来に歴史の資料としてちゃんと残されていたとしたら、ドラえもんがシヤア・アズナブルを知らないわけないだろう!?!」

「なんかすつげー難しいこと言ってるみたいだけど、ドラえもんが知らないわけなかったら、何だっただよスネ夫?！」

ジヤイアンはスネ夫のマシニングトークに眉間にしわを寄せた。

「その話題のシヤアが今何かやらかそうとしてるんだろう!?!だったら未来の歴史の資料か何かに、“シヤアが何をやって地球を滅ぼしたか”の情報ぐらいあるんじゃないの!?!隕石を落とすならどれくらい

大ききなのか、その隕石の落とし方とか！手掛かりの一つくらいあるんじゃないの!？」

スネ夫はドラえもんに訴えかけた。

「……確かにスネ夫くんの言うとおりだ。僕もさつきのニューズでシヤアの名前を聞いたときに同じようなことを考えたよ。シヤアについてより詳しく知っていれば、この未来が消える事件に何かが見つかるんじゃないかって。」

「だったら……ああ、そうだ!!歴史書は……消えたんだっつけ。他に、他に何か歴史に関する道具……それかドラえもんはロボットなんだから、そんな情報を検索したら何か出てこないの!？」

スネ夫の訴えは地球の延いては自分の未来がかかっているためか、だんだんとヒートアップしていく。

「……それなんだけど、僕がシヤアやアムロさんについて……一年戦争などについて知っているのはごく一部だけなんだ。」

ドラえもんはその告白に、周りは一瞬静寂にかえった。

「……なに?・じゃあドラえもんも歴史については勉強できてないってわけ?。」

静寂を破るかのようにジャイアンが気の抜けた質問をした。

「それだけならどれだけよかったか……仮に歴史に関する秘密道具が残っていたとしても、調べられないと思う。」

「どうしてさ?。」

スネ夫のトークにジャイアンと同じくついていけなかったのび太

だが、やつと質問した。

「歴史上実際に起こったとしても、それが必ずしも嘘偽りなく100%記録されるわけじゃないんだ。」

「それは……出来事が起こった時点で、真相の全部が把握されるわけじゃないってこと?」

しずかは白熱するトークの中落ち着いた口調で話す。

「今ある歴史の教科書とか資料集でも、江戸時代とか戦国時代、世界大戦のことが載ってあったとしても、全部が全部書かれてるわけじゃないわ。それで不確定要素が何個かあったりして、それが後になって報道されることだってあるわ。だから考古学者の人たちはみんな研究するのよ。」

「そういえば、この前のニュースかなにかで昔の遺跡がまた見つかったって言ってたな。」

「歴史上人物は実はああだこうだっていうのも、バラエティ番組とかでやるよね。」

「じゃあ……恐竜の化石が新しく発見されたってのも一緒?」

しずかの話題に食いつくスネ夫とのび太とジャイアン。

「話がそれたね……。しずかちゃんの言う通りそういうこともある。実際は把握しきれなくて、後になって真相が判明することだってある……でもそれだけじゃない。」

ドラえもんの最後の一言に、一同はえっ!?という顔つきでドラえもんを目を向けた。

「意図的に……わざと歴史のデータが消されることもある。」

「わざと!?なんで!?!」

詰めかけたのはのび太だった。

「都合が悪いからさ。その歴史の情報が存在している。」

「なおさらなんでさ!?!なんか見せびらかしたらまずいものでもあるの!?!実は偉い人がテストで0点ばっか取ってましたとか!?!」

「そんなのび太じゃあるまいし。」

白熱するのび太をしり目にスネ夫は乾いた横入れをする。

「まあ、それもあるっちゃあるけど……(汗)。」

「あるんだ……。」

「……ひよつとして、危険な出来事を真似しようとする人が存在するから?。」

恐る恐る、しずかはドラえもんに質問した。

「よく気が付いたしずかちゃん!……そう。人々に害をなそうとする悪い奴らも、先人のやり方を参考にしたり、模倣し、真似することもある。それで同じような手口の犯罪やテロが発生することもある。そういう事態を発生させないためにも、政府辺りが危険な情報と判断した歴史のデータは隠ぺいされて開示されないこともあるんだ。」

ドラえもんは重い口調で話した。

「その封印された歴史情報に、一年戦争……引いてはアムロさんとシャア・アズナブルがあつた。」

ドラえもんの一言に一同はざわついた。

「封印されたのに、なんでドラえもんが知ってるのさ?。」

「僕が未来にいるときに、ロボット図書館で読んだことがあるんだ。封印される直前の一年戦争の資料をね。その日一日では全部読み切ることができなかったから、続きは次の日に回したんだ。でも次の日にね、その読んでいる途中だった資料はもうなくなっていた。」

「図書館だから、誰かが持ち出したとか？」

「それも考えて他の図書館や本屋を探したよ。それでも見つからないから、ネットでも検索してみた。でも情報の一片たりとも見つからなかったよ。先日までちゃんと存在していた関連サイトもまるっと消えていた。もう、世界からシャアやアムロさんに関する情報が全部消されたような感じだったよ。そのあとぐらいかな。危険な歴史は隠ぺいされるということをドラえもんズを通してうわさで聞いたのは。」

「それって、知ってる人も消されたりするんじゃない？」

スネ夫は恐る恐るドラえもんに質問した。

「さすがにそこまで手が回らなかったみたいだよ。書いて残したりするのに規制がかかる程度だったから。」

ドラえもんは内心ほつとしているような感じだった。

「そういうことで、アムロさんやシャアに関する深い情報は、調べることができない。そんな感じで闇に葬られた歴史は“黒歴史”って呼ばれているんだ。その中に今回の事件のヒントが隠されていたかもしれないけど……。」

「『黒歴史い!』」

・
・

「ベル……それはいつもの冗談と受け取っていいのか？」

「半分……いえ、本気で詰めかけるつもりよ。」

ラー・カイラムのブリッジでは艦長座席に座るブライトを挟んでアムロとベルトーチカが真剣な表情で向き合っていた。

「……一年戦争でのアムロ、グリプス戦役でのカミーユ、そして前回のネオ・ジオンのジユドーといった事例があるが、本来ならば年端も行かない子供……民間人を戦場に駆り出すことはあり得ない。」

二人の間に割って入るようにブライトはコメントした。

「恥ずかしながら、この戦乱においてロンドベルも人手不足なのは事実だ。」

「ブライト、本当にのびた君を……っ！」

「いや、これでもまだ悩んでいる。……ベルトーチカ。本当にこの……百式の操縦履歴データは、のび太君のものなんだな？」

「ええ。私がしたのはほんの操縦のレクチャーよ。いわばサポート。基本的な動きは私もいじくったけど、これ見て。」

ベルトーチカはブリッジの操作盤を操作し、ディスプレイにX式がネオ・ジオンのギラ・ドーガに向けて遠距離射撃をする場面が映し出されていた。

「これをのび太君が一人でやったってことよ。まるでアムロじゃない。」

「確かに当時のアムロみたいなのはしているが……これを実績とみなすには、不安が残るが……アムロ、お前はどう思った？」

「俺もブライトと同意見だよ。」

「そうじゃない。いわゆる……”ニュータイプとして”の意見だ。こういう場面ならいつもの”アレ”があるはずだ……ニュータイプ特有のプレッシャーみたいなもの。」

そういうことかとアムロは受け取り、先ほどガンダムを駆っていた時の感覚を思い出していた。

「確かに一瞬……後ろから感情的な……何か勢いづいたようなものは感知した。」

「じゃあ、のび太君はニュータイプってこと!？」

ベルトーチカは自分のいい予感が少し的中しそうになったのか、少し興奮した。

「まだ可能性の段階だ。別にニュータイプでなくたって、感情的なプレッシャーならだれでも出せる。それをより敏感に受け取りやすいのがニュータイプさ。もしのび太君が本当にニュータイプなら、彼のほうでも何かしら影響があるだろう。」

アムロは淡々と答えた。

「そういえば、まだ目視できない距離でシャトルを察知してたわ。お友達が危ないとか言ってる。」

「それもまたネタだな。」

ブライトの中ではのび太に関する様々な情報が一つ一つ集まっていき、煮詰まりつつあった。

「倫理的な話だがベルトーチカ。のび太君がニュータイプであるかどうか以前に、彼のような戦闘経験のない若者を戦場に出すのは残酷なことだ。それをわかって、担ぎ出すつもりか？」

「担ぎだすってそんな、ミネバ・ザビじゃあるまいし。」

「ごまかさないでくれ。倫理的なことだけじゃない。民間人を連れ出せば軍としても責任問題がでるし、いろいろな問題が付いてくるぞ。それは承知の上か？」

「もちろん。」

「じゃあ、何かそれ相応の動機があるというのか？」

アムロは逃がさんとばかりにベルトーチカを問い詰めた。

「アムロに死んでほしくない。ただそれだけよ。」

ベルトーチカの一言でその場が一瞬沈黙した。

「アムロに不幸になってほしくないという思いは、カラバにいたときから変わらないわ。だったら、のび太君が参戦してくれることで、アムロが少しでも生き延びれるのなら……！」

「それは、のび太君を生贄にするということか!? 僕の命のためだけに若いものを晒すなら、断固として反対する。そんなバカげたことをせずつとも僕だけでシャアを討って見せるさ。そのためにも君もレガンダムに携わったんだろう」

「生贄なんてそんなつもりはないわ。どっちも生きて帰ってくる。その可能性を、私はのび太君とアムロが手を組んでくれることで見出しているのよ。」

少し激高しかけたアムロに負けじと反論するベルトーチカ。

「……ベルトーチカの言うことを否定もできないし、肯定もできない。こうしている間にもシャアが動いているのに呑気な言い方になるが、しばらく時間が欲しい。」

ブライトの一言が締めとなったか、ブリッジの空気は落ち着き始め、本来の業務に戻りつつあり、ラー・カイラムの進路はロンデニオンに向かいつつあった。

第11話 ララアが来る

光の奔流の中を流されているようでもなく、ただ佇んでいる。今のアムロの身の回りの出来事はそういった感じだった。その奔流の先から、一羽の白鳥がアムロに向かって飛んできた。

アムロはその一羽の白鳥が見えたとき、あるものに気が付いた。

「……ララア・スンか!!」

アムロが白鳥に呼び掛けると、白鳥はララア・スンへと姿を変えた。

「シヤアと僕を、一緒にたに自分のものにできると思うな!」

「意識が永遠に生き続けたら拷問よ。私はあなた達を見たいだけ……。」

訴えかけるアムロに対し、ララアは死人独特の生氣のない声で語りかける。

「私は永遠にあなた達の間になりたいの。」

「それはエゴだよ!!シヤアは否定しろよ!!」

「彼は純粹よ。」

ララアがシヤアの名を口にするたび、アムロの目の前には憎きシヤアの顔が浮かび上がる。

・・・

「純粹だと!?!」

アムロが絶叫した直後、周りはララアといた光の空間から、見覚えのあるラー・カイラム内のアムロの自室になっていた。

「……くそ、また同じ夢を見るようになった。」

アムロは苛立ちながら頭をバリバリと搔いた。すると、寝ていたベッドの隣にある通信用コンソールから呼出音（コール）が鳴った。

「アムロ、ちょっといいかしら?」

「なんだ!？」

ベルトーチカの呼び出しにアムロは怒鳴るように返事した。

「……モビルスーツデッキに上がってきてほしいんだけど。」

「10分後に行く。」

「……また例の夢でも見たの?」

「どうってことはない!!」

アムロはベルトーチカに凶星を突かれたのが気に入らなかった。

・・・

とあるジェガンのコックピット内……。全天周囲モニター前方正面にネオ・ジオンのギラ・ドーガの姿が映る。ギラ・ドーガはマシンガンによる激しい強襲をかけ、ジェガンはその銃弾をもろにくらってしまった。ジェガン内のコックピットは振動し、爆発のエフェクトが表示される。

「やられた!？」

「そういうことだ。クエス・パラヤ。」

クエスはジェガンに搭載されているモビルスーツ戦のシミュレータを楽しんでいた。

ジエガンのハンドルを握るクエスの隣でガイドするアストナージがコックピットのコンソールを操作すると、モニターに表示されていた宇宙空間は暗転し、何も表示されない状態となった。

「……すごいね。前の戦闘で撮影した映像からすぐにCGを作っちゃうなんて。」

クエスが座席を離れると、正面のコックピットハッチが開き、モビルスーツデッキの光景が見えた。

「今度は僕にやらせて！」

コックピットハッチから入ってくるハサウエイとクエスは座席を交代し、今度はハサウエイがシミュレーションを始めた。その様はゲームセンターで楽しむ子供と変わらない。

「軍事機密なんだから、ほかの人に喋っちゃあいかんぞ。」

ジエガンの外のタラップで待っていたアデナウアーは、シミュレーションの余韻に浸るクエスに水を差すかのように告げた。

「ブライト、これは？」

ベルトーチカとともにモビルスーツ・デッキに上がってきたアムロは、ジエガンで楽しんでいるクエスとハサウエイたちを見守るブライトに声をかける。

「ちよつとしたサービスだ。今回の戦闘で民間人を巻き込んでしまったから、無事に送り届けるまでのな。その一環でジエガンのシミュレーション機能でゲームをさせている。」

ブライトがジェガンを見る先では、「くそっ、こいつ！」といった、コンピューターのマビルスーツ相手に苦戦するハサウエイの音がコックピットの中から聞こえる。

「……ブライト、ちよつといいか？」

アムロはブライトの耳元に近づき、内緒話をした。

「……そうか、それはいい機会かもしれん。彼らは、士官食堂か？」

「俺が呼びに行ってくるよ。」

そう言つてアムロはモビルスーツデッキを後にした。

「私を差し置いて何の話よ？」

「例ののび太君たちに、あのジェガンのシミュレータをやらせるんだ。そこで適性検査を試してみる。」

「ああ、のびくんを戦闘に参加させるかの話ね。」

・・・

アムロは士官食堂に入り、のび太やドラえもんたちの姿を探る。すると、奥のほうに5人が固まって談話している光景がアムロの目に入った。

「それは変な夢見たんだねしずかちゃん。」

見つけるや否や5人に近づこうとするアムロだったが、上記のセリフが聞こえると足を止め、そこから話を聞くことにした。

「うん。不思議な夢だったわ。その夢に出てきた人、知らない人だったもの。いきなり白鳥が飛んできたかと思つたら、日本人じゃない女

の人に姿が変わって……。」

「その人の名前、なんて言ってた？」

「たしか、ララアって言ってたわ。」

しずかの夢の話の話を聞くとアムロは驚いた。自分が先ほど見たものと一緒の内容なのだ。

(ララアだ?!?なぜララアが!?)

「しずかちゃん、そのララアって人、なんて言ってたの？」

のび太は不思議そうにしずかに質問した。

「なんだかよくわからないけど、助けを求めてきてたわ。救ってあげてって……。それで、だれを助けてほしいのか聞いてみたんだけど、答えてもらえる前に消えてしまって、それで夢から覚めたのよ。」

しずかは戸惑いながら夢の内容を話した。

「誰を何を助けてほしいのかを言う前に消えてしまうなんて！」

「のび太君が腹を立てたって仕方ないでしょ。」

ドラえもんはなだめるようにツツコんだ。

「……しずかちゃんもそうだった夢みたんだ。」

次に発言したのはスネ夫だった。

「スネ夫さんも見たの？その、ララアさんの夢。」

「しずかちゃんの言うそのララアって人かどうかは知らないけど、僕の全く知らない人が出たのは一緒だよ。それこそ明らかに日本人じゃなかったし、おでこに赤いホクロつけてたし、ありやきつとイン

ド人だね。」

「そう！そんな感じよラアラさんって人！それでスネ夫さんにも助けを求めてたの？」

「助けを求めてたっていうかなあ……なんていうか……。」

「なんだよスネ夫、もったいぶってないで言えよ!!」

うまく説明しづらいのか渋るスネ夫に苛立つジャイアン。

「……正直、よく覚えていないんだ。なんか話してたようには見えただけど、はつきり覚えてない。」

「なんだよそれ！意味ねーじゃん!!」

「そんなこと言ったって、夢なんてコントロールできるわけないじゃん！夢なんだし

！」

「まあ、スネ夫の言う通り夢なんてそんなものさ。夢を自覚してコントロールできるといふ事例もあるけど、そんなのごく一部さ。」

ドラえもんが割って入って止めに入った。

「……まあ、スネ夫は内容がどうあれ、しずかちゃんところにも来たんだよな?」

「私のところにもって……ひよつとして剛さん所にもラアラさんが!」

「……そうなんだよ。俺も昨日の夢でそれっぽい人が出てきて、全然知らないやつだし、一瞬しか見れなかったから、どう話せばいいかわからなかったんだ。」

ジャイアンは頭をかきながら、昨夜自身が見た夢を思い出そうとしていた。

「なんだよ、ジャイアンだつてはつきり覚えてないじゃん。」

「だからお前らの話を聞いて確かめようと思っただんじゃねーか！それ

なのにスネ夫がはつきりしないから……。」

「どーせジャイアンのことだから、リサイタルの夢だったから、それで逃げられたりして。」

「なんだとこの野郎!!スネ夫、今日のお前いつになく口が多いな!ええっ!?!」

ジャイアンはいつものごとくスネ夫の胸ぐらをつかんで殴りかかろうとしたが、のび太とドラえもんしずかの3人に止められる。

「そういえば、のび太はどうなんだ?」

抑えられたことでいったん落ち着いたのか、切り替えてのび太に話を振るジャイアン。

「え?ぼ、僕!?!」

「そうねえ。3人も同じ夢見てるんだから、ひよつとしてのび太さんも……。」

「どうなんだのび太?」

普通に質問するしずかに対し、ジャイアンはアップで迫ったためか、のび太はたじろいだ。

「ぼ、僕……そのララアって人の夢を……見てない。」

のび太はおずおずと答えた。

「オイオイ、のび太!なんでここまで来て仲間外れになってんだよ!!」
「そんなこと言われたって……!」

「ララアにまでこの夢は3人までなんだとか言われたんじゃないだろうな?」

「そんなあ……ララアさんまでスネ夫みたいに……。」

見知らぬ夢の人間にまで仲間外れにされるのび太はトホホと泣きべそをかいた。

「のび太君、別にそこまで悲しむことないじゃないか。僕だってそのララアって人見たことないんだし。」

「うわくんドラえもんくん!!!」

「ははは！よかったねのび太君、仲間ができて！」

ドラえもんを抱き着いて喚くのび太を指さしながらスネ夫は笑った。

「もう、スネ夫さん！大事な話しているのにからかわないで!!」

「確かに気になる話ではあるけど、今回の件に繋がりがあのかの確証が得られない。この話、今は一旦置いておこう。」

4人が騒ぐ中、ドラえもんが話を締めた。

(ララア……無関係な彼らまで巻き込むつもりか!? 一体なぜ……!?)

当初は切り出そうとしていたアムロだったが、ドラえもんたちの夢の話が大きく気がかりとなり、その場を動けず固まっていた。

「あれ？アムロさん？」

一同がその場を去ろうと立ち上がると、一番にのび太がアムロの存在に気が付いた。

「あ、ああ。気分は悪くないかい君たち？ロンデニオンまでまだ時間があるし、こういった閉鎖されたところでは気も滅入るだろう。」

「僕たちは大丈夫です。お気遣いありがとうございます。」

ドラえもんは頭を下げた。

「……そうだ、君たちにちよつとやってほしい……いや、見せたいものがあるんだ。」

アムロは思い出したかのように当初の目的をのび太たちに告げた。

・・・

ドラえもんたちはアムロに連れられ、モビルスーツデッキにまでやってきた。彼らの目にはジェガンやリ・ガズィ整備されているモビルスーツたちの光景が映った。

「ひゃあ……モビルスーツもこうやって生でみるとすごい迫力だ。軍艦とか戦車とはまた違ったインパクトだよ！」

スネ夫はモビルスーツのインパクトに圧倒されつつも、その魅力に興奮し目を輝かせていた。

「あら、あれつてのび太さんたちが乗ってたロボットじゃないかしら？」

しずかが指さした方角には、整備されているX式の姿があった。

「君たち、こつちだ！」

ドラえもん一行がアムロの呼ぶ声が見ると、そこには特に整備されてはおらず鎮座されているジェガン1機と、その周りにアムロとベルトーチカとブライト、整備士のアストナージと、ジェガンの

シミュレータを終えて一息ついているクエスの姿があった。

「アムロさん、ブライト艦長これは一体？」

ドラえもんは不自然にそびえたつジエガンを見ながら聞いた。

「ちよつとしたレクリエーション……まあ、ゲームだ。」

「ロンデニオンにつくまで非戦闘員の皆さんをラー・カイラムに缶詰め状態にさせてしまっているから、息苦しいし、気が滅入るだろ。その気晴らしと思ってな。当艦からのサービスだ。」

「ゲームって……え？このモバイルスーツを動かさせてくれるの？」

アムロとブライトの話聞いたスネ夫は、先ほどから圧巻されているモバイルスーツに乗って動かせることに対する興奮と事故が発生した時などのリスクによる不安とが暴れまわるかのように渦巻いた。

「実際に動かすんじゃないよ。中に入ってコンピュータで遊ぶのさ。相手するのはコンピュータだけど、シートは本物だから臨場感があるよ。」

件のゲームを終えて、ジエガンの中から出てきたハサウェイが説明した。

「ゲームというのは語弊があるなあ。実際はジエガンの中に入ってる戦闘データをフィードバックしたシミュレータだけだな。」

「尤もだが、今回は楽しんでもらうことが目的だから、ゲームでいいだろうアストナージ。」

ブライトのコメントに苦笑しつつもちよつと不本意に思うアストナージ。

「いろいろよくわからないことあるけど、ゲームで遊ばせてくれるってことでいいんすか？」

「ああ、存分に楽しんでくれたまえ。」

「やったー!!じゃあ俺一番乗り!!」

ジャイアンは前にいたのび太とスネ夫を蹴散らしてジエガンのコックピットに入っていた。

「ずるいよジャイアン！」

「僕たちだってやりたいのにー!!」

「はいはい、変わりばんこだよ。」

悔しがるスネ夫とのび太をアストナージがなだめたあと、ジャイアンに操作方法をガイドするため、ジエガンのコックピットに入った。残ったのび太とスネ夫はブライトの案内で、外部モニターからジャイアンの様子を観戦した。

「あら、あなたはやらないのしずかちゃん？」

ジエガンのシミュレータに食いつくのび太たちとは対照的に、後ろでおとなしくしていたしずかに、ベルトーチカは気が付いた。

「わ、わたし、こういうのはちよつと苦手で……。」

「荒っぽくて過激なのはお好きじゃないのね。」

しずかのお淑やかさに、典型的な女の子だなど心の底で少し小ばかに思いついながらも自身も女性であるからわからなくもないといわんばかりに少し共感した。

「くっそー！負けちゃった!!」

ゲームに負けて悔しがりながら、ジャイアンがジエガンから出てきた。

「なんだ、私より点数低いじゃん。がさつだからよ。」

「なんだと!?!いわせておけばー!!」

クエスに馬鹿にされて突っかかろうとするジャイアンをドラえもんのび太とスネ夫は一斉にかかって止めた。

「けんかはよさないか。」

「じゃあ、今度は僕がやる!!」

アムロが止めに入ったのを好機と見たスネ夫は、素早くジエガンにコックピットに入った。のび太はあーっ!と叫びながらスネ夫の後を追おうとする。

「シミュレータは逃げたりしないさ。」

「アムロさんの言うとおりでだよのび太くん。」

アムロとドラえもんに諭されたのび太はがっくりと頭を落とした。

「……確かに総合点は低いけど、格闘に関してはノーダメージで3機は撃破してる。これはこれですごいよ。」

外部コンソールでプリントアウトされたジャイアンのシミュレータ点数表を見て、ハサウエイは唖った。

「さすがジャイアン。素手のけんかになると強いからな。」

ハサウエイが見ている点数表を横からのび太としずかが見ると、スネ夫の番のシミュレータが終わったのか、中からスネ夫が出

てきた。スネ夫は出るなりひやあくと大きい一息をつく。

「さすが、現実のモバイルスーツの操作はシビアだなあ。いつもやってるゲームがどれだけ簡単か思い知らされるよ。」

スネ夫は後ろのジエガンを見ながらハンカチで額の汗を拭いた。

「ここで、スコアがプリントアウトできるよ。」

ハサウエイの案内を聞いたスネ夫は、どれどれ……と外部コンソールを画面表示に従って操作し、自分の点数表をプリントアウトして確認する。

「お！ジャイアンに勝った!!」

「へえ、僕といい勝負だね。」

ハサウエイは自分の点数表をスネ夫のそばに持っていき見せ合いつこした。スネ夫にリードされたのが耳に入ったのか、悔しがってジャイアンはもう一度ジエガンに乗り込もうとするが、ブライトに止められた。

「やっと僕の番か。」

やれやれと言いながらのび太はジエガンのコックピットに入りこんだ。

「どうせのび太のことだから、すぐやられて終わりだよきつと。」

「へっへっへ。俺様は何とかびりは免れたってことだな。ま、俺もう一回やるけど。」

いつものように後ろでのび太をせせら笑うスネ夫とジャイアン。

しかし、のび太は操作方法のレクチャーを受けていて、二人の声は聞こえていなかった。

「ここをこう操作して、準備ができたなら、このボタン押してスタートだ。」

のび太はアストナージの指示通りにコンソールを操作していくと、全店周囲モニターにバーチャルの宇宙空間が表示され、“PLAYE R 1 READY”文字が正面に表示され、ゲーム開始のカウントダウンが始まった。

5, 4, 3, 2, 1……START!!という合図からほんの数秒後に、前方の遠い距離からギラ・ドーガが自機に向かって飛来してくるのが見えた。

のび太は反射的にジェガンのビームライフルを構えると同時に、見えたギラ・ドーガに照準を合わせてトリガーを引くと、ライフルからビームが発射された。

ビームはそれることなく表示されていたギラ・ドーガの胸部に直撃し、爆発四散。敵機撃墜が確認できた。

「よっし、命中!」

「へえ、結構距離あったのにうまく当てたな。」

アストナージは舌を巻いた。間髪入れずに次の敵機がモニターに表示される。今度は1機だけではなく3機ほど同時に出てきたが、のび太はひるむことなく冷静に照準を動かし、正確に射的していった。これらも命中。撃ち漏らすことなく全弾当てて全機撃墜した。

(素早く正確に当てて行ってる……一部の敵機は出現と同時に撃ち落としてるぞ。本当にニュータイプだったりするのかな?)

アストナージは思わずのび太の射撃の腕に見とれていた。このの

び太の活躍ももちろんスネ夫やジャイアンの時と同じように外部モニターで映し出されており、ギャラリーは盛り上がっていた。

「なんだよ、のび太のくせにバンバン撃ち落としてくれちゃって!!」

スネ夫は自分の成績がリアルタイムで追い抜かれているのがさぶる気に入らず、地団駄踏んだ。そんな彼の思いに追い打ちをかけるかの如く、のび太が操縦するジエガンが、次々と敵機を撃ち落としていく様子が映し出される。

「すげえな……射的に関しては見るところがあるって聞いたことあるけど、改めてみると、のび太もなかなかやるなあ……。」

結果を出せなかったために先ほどまで荒ぶっていたジャイアンでさえ、のび太が活躍する映像に熱中していた。

1機、また1機と敵機を撃ち落としていると、突然画面の下からギリ・ドーガが飛び出し、ビーム・ソードを振りかざしてきた。

「うわっ!!」

接近戦用の武器に切り替えるという術を思い浮かばなかったのび太は、反射的にジエガンを交代させて回避行動に移った。直撃は免れたものの、ジエガンの膝の部分に攻撃が掠った。

「大丈夫。まだ動けるよ。……しかし、今のもうまいこと避けたな。」

「あたれーっ!!」

敵機から距離をとったのび太は、ライフルを連射して撃ち落とすた。

「今まで遠くから来てたのにいきなり下からくるのとか、そんなのあ

り〜!？」

「はっはっは。そんなこと言ったら戦場で生き残れないぞ〜?」

敵の奇襲に多少パニックるのび太をしり目にアストナージはケタケタ笑う。

「アストナージ、そろそろ……」

アストナージの通信機にアムロからの通信が入った。

「あ、わかりました。……ちよつと前ごめんよ。」

敵が出てきていない時を見計らってアストナージはジェガンに前方ハッチを開けて外に出た。

「操縦方法はわかるだろ。君はそのまま続けといてくれ。」

アストナージはハッチを閉じ、ジェガンのコックピット内はのび太一人だけになった。

「続けろって……出てくる敵倒すだけだよね?」

アストナージの指示通り、のび太はそのままシミュレーションを続けた。いつも通りに遠くからくる敵機は射撃で淡々と落としていった。しかし、突然の格闘戦を仕掛けられるとのび太はそこが弱いため、きれいに捌くことができず、運が悪いと先ほどのように直撃は免れるものの軽傷を負ってしまう。

塵も積もれば山となる。少量のダメージとはいえ、蓄積すればいずれジェガンの耐久力は尽きてしまい、このままではゲームオーバーになってしまうだろう。

しかし、回数を重ねていくうちにのび太も慣れたのか、敵からの奇

襲のパターンを把握しはじめ、格闘攻撃に対する回避行動もだんだんきれいな動きになってきた。

「そろそろ来る頃だな……。」

のび太のつぶやき通り、また画面外から突如ギラ・ドーガが現れ、またビームソードを振りかざす。

「今だ!!!」

しかし、のび太は慌てるそぶりを見せず、あらかじめスタンバっていたかのようにビームサーベルに武装を切り替え、ギラ・ドーガのビームソードを切り払った。

「おおっ!?!のび太のやつ、敵の攻撃を押しよけた!!」

外部モニターで観戦していたジャイアンは思わず感激した。

「そこだ!!!」

敵の攻撃を押しよけたことでよろけたギラ・ドーガの隙について、のび太はビームサーベルの一撃を浴びせた。見事ビームサーベルが直撃した敵機は爆発四散。のび太は初めて格闘戦で敵機を落とした瞬間だった。

「すごいわ、のび太さん!!」

「あいつもなかなかやるじゃねえか!!」

のび太の奮闘により、外部モニターも周りは盛り上がっていた。

「よーしーこのままどんどん倒していくぞー!」

苦手なやつを倒せてテンションが上がったのび太は、勢いづいて次に進もうとする。そしてまた遠方からの敵が表示された。いつも通りに射撃で倒そうと思ったのび太だが、向かってくる敵機にどこか違和感を覚えた。

「……なんだろう？いつもの敵じゃない？」

よくよく見ると今まで倒してきた緑のギラ・ドーガとは違い、向かってきたのは形も違うどこかすらつとした、白いモビルスーツだった。

「あれって……ガンダム？」

のび太が駆るジェガンの目の前に現れたのは、Rガンダムとは違う、少しシンプル目で胴体の明るめの青が目立つガンダムだった。

くおまけく

・昨日見たスネ夫の夢

スネ夫「なんだ？タイムマシンの空間みたいなどころだけど……。目の前に白鳥が飛んできた。白鳥がララアに変身する。」

スネ夫「白鳥が人?!いったい誰?!」

ララア「怖がらなくていいわ……。私はあなたと話がしたいだけ……。」

スネ夫「話が見たい？」

ララア「そう……。あなたに聞いてほしいことが……」

スネ夫「あ！ひよつとして僕のコレクションを見に来たの?!」

ララア「……へ？」

♪BGM：スネ夫が自慢するときの曲

スネ夫「このスポーツカーのラジコンはね！日本で発売されていないうえ、世界に数台しかないって言われてる超限定品でさ、パパに頼んで買ってもらって……」

ララア「……だめだわ。この子、話聞いてくれない……。」

スネ夫「それでこの戦車のプラモが……ねえ、ちよつときいてるの!?!……って、あれ？消えてる。いなくなっちゃった……なんだよ、人が話してる途中で失礼だな！」

・ ジャイアンが見た夢

ジャイアン「なんだ？このピンクの靄は？またアニマル惑星に続く道に入っちまったか？うう……アニマル惑星のみんなを悪く言うつもりはねーけど、俺あの冒険にはあんまりいい思い出がないんだよなあ……特にこの靄。」

目の前に白鳥が飛んできた。白鳥がララアに変身する。

ジャイアン「な、なんだ!?!」

ララア「怖がらなくていいわ……私はあなたと話がしたいだけ……。」

ジャイアン「なんだそりゃ?」

ララア「そう……あなたに聞いてほしいことが……」

ジャイアン「ん？なんだ俺の足元に何か……なんと！これは俺が愛用しているラジカセとマイク……リサイタルセットじゃねえか!!これがあるということ……そうか！」

ララア「あ、あの……私の話を……。」

ジャイアン「これは俺のリサイタルってことか!!そうと決まれば、もう全力で歌うしかねえ!!」

ララア「い、いったい何を……!?!」

ジャイアン「なるほどそういうことか!!そこにいる突然現れたあんたは俺の歌を聴きに来た観客ってことだな!!?いいぜいいぜ!!今日の俺は絶好調だー!!」

ララア「い、嫌な予感がする……!!!」

ジャイアン「よし、機材は万全だ!!早速行くぜ!!」

ララア「こ、これは……逃げなきゃ……!!逃げなきゃまずい!!」

ジャイアン「ボエエエエエエエエツ!!!」

ララア「ああ……アムロ。刻(とき)が見える……。」

・

アムロ「!?」

ベルトーチカ「どしたの？」

アムロ「なんかすごい嫌な感覚が……。耳を劈くような。」

ベルトーチカ「疲れてるのよ。」

アムロ「だいたいけど……。」

アムロ(ララア……君を通して妙な感覚が来たぞ。いったい何があつた?)

スウィートウォーター内

シャア「ええい!なんだこの感覚は!!ララアから離れる俗物め!!!」

ナナイ「大佐っ!」

・のび太の夢

のび太「ZZZ……。」

目の前に白鳥が飛んできた。白鳥がララアに変身する。

ララア「起きて……目を覚まして……。」

のび太「ZZZ……。」

ララア「私はあなたに伝えなければいけないことがあるの。」

のび太「ZZZ……。」

ララア「……あの、ほんとに起きてもらえませんか?本当に重大な話なんですって。ってというか夢の中なのにどうしてそこでまた寝ているの?」

のび太「ZZZ……。」

ララア「……だめだわ。起きてくれない。他をあたりましょう……。」

・しずかの夢

しずか「これは夢……？だとしたら一体ここは……？」

目の前に白鳥が飛んできた。白鳥がララアに変身する。

しずか「白鳥が人!!? いったいこれは……!!?」

ララア「怖がらなくていいわ……私はあなたと話がしたいだけ……。」

しずか「話がしたい?」

ララア「そう……あなたに聞いてほしいことが……」

しずか「見るからに相当困っていきそうね。私でよければ何でも話して。」

ララア「……やっとまともな子に出会えた!!!! (号泣)」

第12話 死闘（バーチャル）の果て

「あれってアムロ大尉のガンダムじゃ？でもなんかちよつと違うような……。」

目の前から向かい来る白いモビルスーツ。のび太は反射的にビームライフルを構えてトリガーを引いた。しかし、簡単にビームは回避されてしまった。

「外れた!？」

予想に反するかのような結果にのび太は驚いた。

しかしのび太はすぐに我に返り、間髪を入れずにライフルを連射した。だがその攻撃に相手は全く動じない様子だ。のび太はのび太でがむしやらに連射しているわけではなく、正確に狙って当てようとしているが、相手のガンダムはまるでこちらの攻撃を予測しているかのように避けていく。

「これだけやっても当たらないなんて!!」

のび太は焦り始めた。すると、白いガンダムはゆっくりと腕を伸ばしてきた。そして次の瞬間には、いつの間にか持っていたビームライフルの銃口が光っていた。一瞬の出来事である。

ガンダムの放った一筋の閃光は見事にジェガンの横っ腹に命中していた。腹に受けた衝撃により、コックピット内は大きく揺れ動いた。それが大きな隙となり、白いガンダムは一気に距離を詰めてきて、再び腕を伸ばすと今度は腰部に装備していたビームサーベルを抜き取り、そのままのび太のジェガンへと斬りかかった。

「やられる!？」

そう思ったのび太は条件反射からか瞬時にジエガンを後ろへ飛び退かせた。直撃は免れたものの、右足を斬られてしまう。

「あーっ、右足が!!」

足をばたつかせながらも必死にガンダムから距離を取ろうとするのび太だったが、逃がさんとばかりにさらに距離を詰めようとガンダムが迫ってくる。

「わーっ来るな来るなー!!」

のび太のジエガンは迫りくるガンダムを追い払おうとビームライフルやバルカンといった手に持つすべての武器を乱射し弾幕を作った。もはやこの時ののび太は正確な射撃をするほどの余裕がないことを相手のガンダムに悟られたかのようにすべての攻撃を見切られてしまう。

そしてもう一度ガンダムに距離を詰められてしまい、ガンダムの一太刀が見事にジエガンに直撃した。

ジエガンのコックピットはそんな衝撃を再現するように激しく振動し、次にモニターの画面には“GAME OVER”の文字が表示された。

「あ……あくあ。負けちゃった。」

戦闘の緊張から解放されたのび太は一気に肩の力が抜けた。

「お疲れ! だいぶ善戦したな!!」

コックピットハッチが開き、アストナージが顔を見せ、気が抜けているのび太に手を差し伸べた。のび太はアストナージの手に引かれ、よろよろとコックピットから外に出た。

「すごいじゃないのび太さん!!」

「おめえもなかなかやるじゃねえーか!!」

へとへとになったのび太を外にいた仲間たちが出迎えた。

「ガンダム相手にあそこまでやるなんて!!」

「……ふくん。やるじゃない。」

そういうのは、ガンダムと戦うというドリームマッチを見れたことに驚愕及び感激するハサウェイと、自分ではそうならなかったため少し不機嫌なクエスだった。

「でも……あんなに強いのが出てくるなんて……聞いてないよ。」

「のび太さんは十分やったわよ。」

「のび太くん、ゲームでもへとへとになってどうすんの。」

ドラえもんは、疲労で倒れそうになるのび太を支えた。

「……でも、本当によく動く敵だったなあ。このゲームに出てくる敵って、過去の戦闘データから作ったコンピュータでしょ?」

「何言ってるんだスネ夫? コンピュータでも難易度がればよく動く敵なんているんじゃないの?」

「そういう意味じゃないよジャイアン。なんていうか、コンピュータの動きにしてはワンパターンさがないっていうか生々しいっていうか、格ゲーの対人戦でもしてるように……そう! 人が乗ってる……誰かが動かしてるような感じだったんだ!! 僕たちが動かしたのと同じように!」

スネ夫はジエガンのシミュレータを指さしながら言った。

「だとしたら、いったいどこで誰が……?」

ドラえもんはモビルスーツデッキのあたりを見回して、同じくシミュレーションが行われていそうなジエガンがどれかを探した。

「それは僕だよ、スネ夫君。」

一同が声の方へ振り向くと、そのにはアムロがいた。

「ええっ!?アムロ大尉が直々に相手してくれてたってこと!?!」

強敵の意外な正体にのび太は驚いた。

「のび太君の動きが、なかなか面白い動きをしていたものだから、アストナージに無理を言って、ちよつと乱入させてもらったんだよ。」

後ろにいたアストナージがアムロに親指で指されると、いたずらでもした後かのようなしてやったりな顔、“ドツキリ大成功”みたいな顔をしていた。

「そんなあゝ……本職の人相手じゃ勝てるわけないじゃんかー!!」

「だが、のび太君の腕も捨てたもんじゃないさ。確かに君の射撃を避けたけど、その内何発かはきわどかった。」

「それにしても余裕で避けていたような気がしますが……。」

「それに僕が接近戦を仕掛けた時、本当は胴体を斬るつもりだったんだけど、のび太君があそこで避けたことで、右足しか斬れなかった。あそこで決めるところだったんだが、本当に予想外だよ。」

ほめ倒してくるアムロにのび太は照れた。

「それで、アムロさんよオ。そこまでのび太をほめ倒すっていうんなら、ひよつとしてロンド・ベルにスカウト……なくって話もあったり

すんのか?」

「そうそう。その辺どうなんでしょうかね〜アムロセンス。」

ジャイアン（と彼に便乗したベルトーチカ）の質問にアムロは楽しい空間から現実引き戻されたかのように一瞬固まった。

「ああ、それなんだが……。」

「ジャイアンそりゃないよ。」

スネ夫は無意識ではあったもののアムロを遮った。

「ロンド・ベルのお手伝いするっていうことはつまり、宇宙に関する仕事をするってことでしょ?本で読んだことあるけど、宇宙飛行士になるには、勉強もスポーツもできなきゃいけないって話だよ。ですよねアムロさん?」

「あ、ああ。そうだな……体力と学力に問題がなければ。」

「するてーとのび太は……あつ。」

ジャイアンは日ごろののび太を思い出し、察した。

「……しずちゃん、のびくんってそこまでひどいの?」

「え、ええ……お世辞にもいいとは……。」

ベルトーチカとしずかはのび太に聞こえないように小声でやり取りした。

「……ふん!どうせ射撃とあやとりはうまくても、勉強も運動もできませんよーだ!!この間のテストも0点だったし!!」

皆まで言われないことが逆に腹が立ったのかのび太はむくれた。

「無理に参戦できなくてもいいと思うわのび太さん。ロンド・ベルの人たちのお手伝いができるのは誇らしいことだけど、その分危険が伴うのよ。宇宙には空気もないこととかいろんな問題があるし、その中で重たい機械動かして戦争なんてするんだから、命がいくつあっても足りないわ。そんなところに無理に行くなんて……。」

「それは僕が勉強運動が全然だめだから生き残れないってこと？」
「それは違うよのび太君。」

アムロが割って入る。

「戦場とはどこで何が起こるかわからない。確かに能力はあるに越したことはないが、どれだけの能力を有していても、死ぬときは死ぬんだ。」

この時のアムロの言い方はどこことなく冷徹で容赦ない雰囲気だった。

「僕も過去に〃一年戦争〃を経験してきたけど、僕より強い人たちなんていくらでもいたさ。敵でも味方でも。でも、僕より上だったのにも関わらず、みんな死んでしまったよ。その様子なんて、そりやあもうあっけなかったさ。戦いの行く末なんて、誰にもわからない。それを考えればしずか君の言うとおり、義務もなければ戦いには参加するもんじゃないよ。生きてるだけでも儲けものさ。」

「そうよのび太さん！生きてるだけでも素晴らしいことなのよ。私が言いたいのは、無理に命を、自分の命を粗末にするようなことをしてほしくないのよ。」

しずかはアムロの言葉を借りるかのように続けて言った。

「今まで一緒に仲良くしてきた人がいきなり死んでいなくなるなんて、私はいやよ……!!」

「しずかちゃん……泣かないでよ……。じゃあ、宇宙じゃない危なくないところで頑張ればいいんでしょ。」

のび太は泣きそうなしずかを慰めるように言った。

「そうなるには、まず0点の成績をどうにかしないとなのび太君。」

「そうだな。野球でもジャイアンズでもっと活躍してもらわないとな。球拾いばっかやってんじゃねえぞ！」

「ついでに、僕の道具に頼るのも控えてもらわないとね。」

「もう！ドラえもんまでく！！」

のび太がムキになると、一回はどつと笑った。小粒の涙が少し残るも泣きそうになっていたしずかも笑った。

「……ロンド・ベルに誘い辛くなっちゃったわね。」

「ああ、このシミュレータで何かきつかけになると思ったけど、しずか君のおかげで、目を覚まさせられた気分だよ。」

〴〵やれやれ自分で用意しておいて……〴〵といいながら、アムロはベルトーチカをそばにシミュレータ状態のジエガンを見る。

「でもものびくんもなかなかやるもんでしょ。」

「ああ。並みのパイロットでは相手にならないくらいだよ。」

「じゃあどうするの?」

ベルトーチカのセリフを聞いて、アムロは談笑しているドラえもん一向に目を向けた。

「……僕がレガンダムで頑張るしかないな。のび太君たちも今を頑張ろうとしているように。」

アムロとベルトーチカがレガンダムの方に向かうと、ハンガーにはドラえもんたちの空気を讀んだのか、いつの間にかその場を退場していたアストナージがすでに基礎部分の整備を行っていた。アストナージが向かってくるアムロと目が合うと、「お先に」な感じで手を挙げて合図した。

「……サイコミュ調整、仕上げないと！（汗）」

「あとで〃フィン・ファンネル〃来るんだったつけね!!（汗）」

アムロとベルトーチカはそんな彼に申し訳ないと思い、そそくさと持ち場に戻った。

「……あれがアムロ・レイ……普通じゃないっていうあの人があ。」

そんな彼らを……特にアムロを注視していた人物が一人、クエスだった。

……

「みんな！見てみなよ!!」

ハサウェイが声を上げると、のび太やドラえもん含めた一同はラー・カイラムの窓に集まった。

「コロニーだよ!!サイド1のロンデニオンだ!!」

ラー・カイラムの窓には、ここからでは捉えきれないくらい巨大な筒に、三枚の長大な太陽光反射用のミラーが傘のようにくっついたスペースコロニーが見えた。

「で、でけえっ……!!」

「間近で見ると本当に壮観だね。」

ジャイアンとスネ夫はコロニーのあまりのスケールの大きさに圧倒されていた。

「シリンダーの中に街がある。湖も……!!」

「まあ、きれい!こんなにも緑が……この中に何千万……何億人と住んでるのね!!」

筒の一部の面は透き通っており、そこから見える街として建物や施設、その合間合間にバランスよく緑が生い茂ったコロニーの中の様子に、クエスとせずかは感激した。

「こんなを見れば、人が革新できるって信じられる。」

「そうだね。ザビ家がジオン公国として、地球に独立宣言したくなかったって気分がわかるよな。」

「知ってる!一年戦争」でしょ!!」

興奮気味の声で発したクエスの「一年戦争」というキーワードに、のび太とドラえもんは感づいた。スネ夫とジャイアンはというと、話に興味がないのかロンデニオンのコロニーに夢中だ。

「ああ、あの時だぜ?赤い彗星のシャアがジオン軍にいてさ。それが今度のネオ・ジオンの総帥やっっている人ね?」

(ドラえもんが言っただけのことと一緒にだ。)

のび太は割り込もうとせず、じつとハサウェイの話に耳を傾けた。

「へえ……?でもシャアって」一度は連邦軍で「仕事してなかった?」

(確かアムロ大尉と共闘したことがあったって、ベルトーチカさんが

言ってたな……。」

ドラえもんはクエスのセリフに集中した。

「ティターンズの反乱の時かい？一年戦争でジオン公国が負けた時に、シャアはアステロイド・ベルトに逃げてたんだよな。それでなんで知らないけど、アステロイド・ベルトから帰ってきて、エウーゴつてところでアムロさんとか父さんとで、ティターンズと元ジオンの悪い女と戦ったんだってさ。」

「グリプス戦役っていうんでしょ？」

「でも、わからないわ……どうして一緒に戦ってくれた人が、地球に隕石なんか落とすのかしら？」

「しずかちゃんの言うとおりだよ。何にも地球まで……未来まで壊すことないだろうに！」

のび太は少し声を荒げた。

「そう？……私は分かる気がするけど。」

分からない空気の中でそれを打ち破るかのように、理解しているクエスの言葉が出て、のび太としずかはきよんとした。

「シャアって哲学やってるのよ。」

「……ドラえもん、哲学やってる人はみんな隕石落とそうとするの？」

「いや、その理屈はおかしい。」

ドラえもんの切り返しも尤もなものだった。

「シャアの父親ってスペースノイドの独立を宣言したジオン・ダイクンでしょ？でも、ザビ家に暗殺されちゃって……。」

「暗殺？どうしてさ。」

のび太はクエスに質問した。

「利用するためよ。ジオンの名前を使って、自分たちが成り上がろうとしたんだよ。」

「ひどいことするなあ!」

「ひどい話だけど、戦争とか苛烈な歴史には、そういった裏話もよく聞くわね。」

再び声を荒げるのび太のそばで、しずかは冷静に解説する。

「それで、息子にあたるシャアがザビ家の人たちに復讐しようとして、ザビ家率いるジオン軍に入ったのよ。」

「それが、シャアが戦争に関与することになったきっかけなのか……。」

ドラえもんはこの宇宙のどこかに潜んでいるであろうというシャアの姿を想像しながら、展望窓から移る宇宙の景色を見た。

「それに、今でもジオン・ダイクンの宣言って支持されているんだから、シャアが地球に心を引かれっぱなしの人を何とかしようっていうのも分かるわ。だから地球を寒冷化させるのよ。頭冷やして、分かれって!」

「寒冷化って……地球を永遠の冬にしようってこと?」

のび太はファイフス・ルナ爆破・脱出時にした、アムロとの話を思い出した。

もしもファイフス・ルナが地球に衝突するか、大気圏内で爆発した場合ファイフスの破片と粉塵がオゾン層で永遠に漂い続け、太陽の光が今後地表に到達することがなく、気温が永遠に下がり続ける核の冬が来るといったものだ。

そのファイフス・ルナを地球に落とそうとしたのは他ならぬシヤアなのだから、今の話でのび太はまた一つシヤアの地球つぶしの話が一つ繋がった気がした。

「それにしたって、地球に隕石落とすだなんて、乱暴だわ。」

しずかはクエスの話の内容の過激さを訴えた。

「そんなこと言ったって……どしたのハサウエイ？」

クエスは無言で怪しそうにじつと自分を見つめるハサウエイに気が付いた。

「……ほんとは何でも知ってるんじゃないのか？」

「何でもってまさか……今言ったことって全部、新聞とかテレビで言っただことばっかしよ？」

「でも、そこまで纏められるのはすごいよ。」

「ほんと。ハサウエイさんの言うとおり、まるでシヤアの身内か関係者みたいに話してたわクエスさん。」

「……でも、本当に地球の寒冷化なんてしていいのかな？しずかちゃんの話の言う通り乱暴だよ。他にもやり方はあるだろうに。」

「のび太君にしてはまともな意見だね。」

「のび太にしては」というドラえもん言葉にムツとしたのび太だった。

「俺、シヤアはニュータイプだっと思っていたんだよな。そんな人が何で地球つぶしなんかやって考えちゃうんだよ。」

「ニュータイプだって言われてるアムロにもあったけど、あの人は優しいと思う。でそれだけじゃないのかなとも思ったな。」

クエスは展望台の無重力空間を利用して、流れに身を任せたちよつとした宇宙遊泳をしながら言った。

「それだけじゃないって?」

「優しいだけで、あとは他の大人とおんなじみたい。」

そんなハサウエイとクエスの会話にのび太は気になっていた単語があった。

「ニュータイプって?」

「あんた知らないの?」

「コロニーとか宇宙に住むようになった人たちはさ、無重力や上下感覚に馴れたように、新しい能力が発揮できるんだ。それがもつと発揮されて、エスパーみたいな超能力者にもなれることから、ニュータイプって言われているのさ。」

(ああ、だからアムロさんはあの時声に出していない僕たちの助けの声が聞こえたりしたのか。それなのにエスパーとは違うのはニュータイプってやつだから……。)

ハサウエイのニュータイプについての説明を聞いたとき、のび太はまたファイブ・ルナ脱出時のアムロとのやり取りを思い出した。

「アムロさんだって、あの人が初めてモビルスーツ……初期のガンダムのコックピットに座った途端に操縦できて、ジオン軍のザクを倒したんだぜ。コンソールパネル見ただけで配線とか駆動系の配置が分かったとかなんとか……それもニュータイプだからっていうのも、専らの噂さ。」

「じゃあ、アムロさんがあんなに強いのも、その……ニュータイプだから?」

のび太の脳裏には、先ほどのジェガンのシミュレーターでアムロと

戦った時に、自分の攻撃がことごとく避けられ、隙を突かれてあつけなく撃墜された苦い光景がよみがえった。

「それものび太君があんな形で体験することになったんだから、ファンからすればドリームマツチだよ。」

「ニュータイプの恐ろしさってやつをその本人から直々に思い知らされたんだから、いい経験になったんじゃない？」

クエスは皮肉たっぷりにのび太に言った。

「おーい、みんな。そろそろロンデニオンに着くころじゃない？コロニー港のハッチが近くなってきた。」

スネ夫の呼びかけに一同はもう一度展望窓に集まり、目と鼻の先のロンデニオンコロニーの光景に改めて圧巻されていた。